

平安京右京一条二坊十五町跡・  
御土居跡発掘調査報告書

2 0 2 3

株式会社 文化財サービス



## 例 言

- 1 本書は、京都市中京区西ノ京中保町2番・3番・4番で実施した、平安京右京一条二坊十五町跡・御土居跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 22H371)
- 2 当調査は、店舗建設に伴う発掘調査である。
- 3 現地調査は、事業者より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され、望月麻佑、菅田 薫(文化財サービス)が担当した。
- 4 調査期間は令和5年6月12日～7月13日である。
- 5 調査面積は142.4㎡である。
- 6 本文・図中で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「花園」「衣笠山」を参考にし、作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆は望月が行い、編集は望月、中西佳奈江(文化財サービス)が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は望月が行い、出土遺物の撮影は写真 楠華堂(内田真紀子氏)に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平(以上、文化財サービス)、作業員(株式会社京カンリ)、重機掘削(株式会社一誠建設)、資機材リース(株式会社 Soid)

〔整理作業〕 和氣清章、吉川絵里、清須慶太、中 優作、森下直子、野地ますみ、下市紗耶香、鈴木 巴、西尾知子、内牧明彦、溝川珠樹(以上、文化財サービス)
- 13 自然科学分析については、株式会社古生態研究所に依頼した。
- 14 出土遺物の年代観は、下記の文献に依った。

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

日本中世土器研究会『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022年

瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史篇四』第一法規出版印刷株式会社 1993年
- 15 図20で使用している『京都惣曲輪御土居絵図』は京都大学総合博物館より、図23で使用している『改正京町繪圖細見大成』は立正大学図書館より、データの提供を受けた。図18・19で使用している『實地測量京都市全圖』及び『京都近傍図』は『慶長昭和京都地図集成:1611(慶長16)年～1940(昭和15)年』(柏書房 1994年)より、図22・24で使用している『寛永後萬治前洛中絵図』は京都大学附属図書館所蔵のものを転載・一部加工した。図25で使用している『石山寺縁起』は国立国会図書館デジタルコレクションより引用した。
- 16 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

鈴木久男(京都産業大学)、辻本裕也(古生態研究所)、藤澤典彦(大阪大谷大学)、三枝暁子(東京大学)、三好美穂(元奈良市埋蔵文化財センター)、西王寺

# 目次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3
第Ⅱ章 位置と環境	
1 位置と環境	5
2 既往の調査	6
第Ⅲ章 調査成果	
1 基本層序	12
2 検出遺構	12
3 出土遺物	25
第Ⅳ章 まとめ	
1 御土居について	30
2 御土居構築以前の遺構について	32
3 今回検出した遺構の歴史的環境について	35
附章 平安京右京一条二坊十五町跡・御土居跡の自然科学分析	41
(株式会社 古生態研究所)	

# 図版目次

図版 1	遺構	1. 遺構検出後 調査区全景 (南から)
		2. 調査地遠景 (調査地上空より北方 左大文字山を臨む)
図版 2	遺構	1. 遺構完掘後 調査区全景 (南から)
		2. 遺構完掘後 調査区全景 垂直写真 (上が北)
図版 3	遺構	1. 池003 敷葉工法検出状況 (南から)
		2. 池003 埋土除去後 (北から)
図版 4	遺構	1. 池003完掘状況、泉002埋甕据付穴検出状況 (北から)
		2. 泉002 埋甕据付穴検出状況 (南から)
図版 5	遺構	1. 泉002 埋甕据付穴 南北断割後 (西から)

		2. 泉002完掘状況、井戸017石組検出状況（南から）
図版6	遺構	1. 井戸017 井戸枠内掘削後（西から） 2. 井戸017西半 井戸掘方掘削後（西から）
図版7	遺物	1. 池003 出土遺物1 2. 池003 出土遺物2
図版8	遺物	1. 泉002 出土遺物1 2. 泉002 出土遺物2 3. 泉002 出土遺物3
図版9	遺物	1. 井戸017 出土遺物 2. 土坑001・011、溝014 出土遺物

## 挿図目次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区割・基準点配置図（1：100）	4
図4	平安京条坊図（1：80,000）	5
図5	既往調査位置図（1：5,000）	7
図6	調査区東壁・北壁・西壁断面図（1：80）	13
図7	調査区試掘坑北面・南面断面図（1：60）	14
図8	調査区東側・西側南北断割断面図（1：50）	15
図9	調査区全体平面図（1：80）	16
図10	池003埋土除去後平面図（1：50）	18
図11	池003完掘状況平面・断面図（1：60）	19
図12	泉002平面・断面図（1：40）	20
図13	井戸017平面・断面・立面図（1：40）	22
図14	柱穴009、土坑010・011平面・断面図（1：40）	23
図15	溝013・014平面・断面図（1：40）	24
図16	出土遺物1（1：4）	26
図17	出土遺物2（1：4、1：8）	27
図18	明治三十五（1902）年『實地測量京都市全圖』	30
図19	大正四（1915）年『京都近傍図』	30
図20	元禄十五（1702）年『京都惣曲輪御土居絵図』と今回調査地（1：1,500）	31
図21	泉002復元平面・立面図（1：40）	33
図22	寛永十九（1642）年『寛永後萬治前洛中絵図』	35
図23	天保二（1831）年『改正京町繪圖細見大成』	35
図24	『寛永後萬治前洛中絵図』と新長谷寺境内模式図（1：1,500）	37
図25	『石山寺縁起』第4巻	37

## 表目次

表 1	既往調査一覧表 .....	9
表 2	遺構概要表 .....	12
表 3	遺物概要表 .....	25
表 4	京都市近郊の構造物を伴う泉一覧表 .....	34
表 5	遺物観察表 .....	40

# 第 I 章 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯（図1）

本調査は店舗建設工事に伴って実施された発掘調査である。調査地は京都市中京区西ノ京中保町2番・3番・4番に所在し、平安京右京一条二坊十五町跡・御土居跡に該当する。店舗建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。その結果、遺構の存在が確認されたことから、事業者に対し発掘調査の指導が行われた。調査は、事業者から文化財サービスが委託を受けて実施することになった。

## 2 調査の経過（図2）

発掘調査は、2023年6月12日から現地作業に着手した。調査区は、文化財保護課の指導により、東西18.0m、南北8.8m、面積142.4㎡に設定した。現代土を重機掘削で除去し遺構面の検出作業を人力で行った後、御土居の土塁構築土の堆積状況を調べるために、文化財保護課が掘削した調査区中央部の東西試掘トレンチに加え、調査区の東側と西側に設けた南北断割トレンチを新たに掘削し、断面観察を行った。その結果、土塁構築土は調査区内では僅かにしか認められず、基盤層上面において南北朝期から御土居構築以前の泉と池、井戸などを検出した。検出した遺構は掘削後、写真撮影や測量作業などの記録作業を行った。写真撮影の機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。調査後は埋め戻し作業を行い、7月13日に全ての工程を終了した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査及び指導を受けた。また、文化財保護課が設立した本調査の検証審査員である鈴木久男氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を受けた。

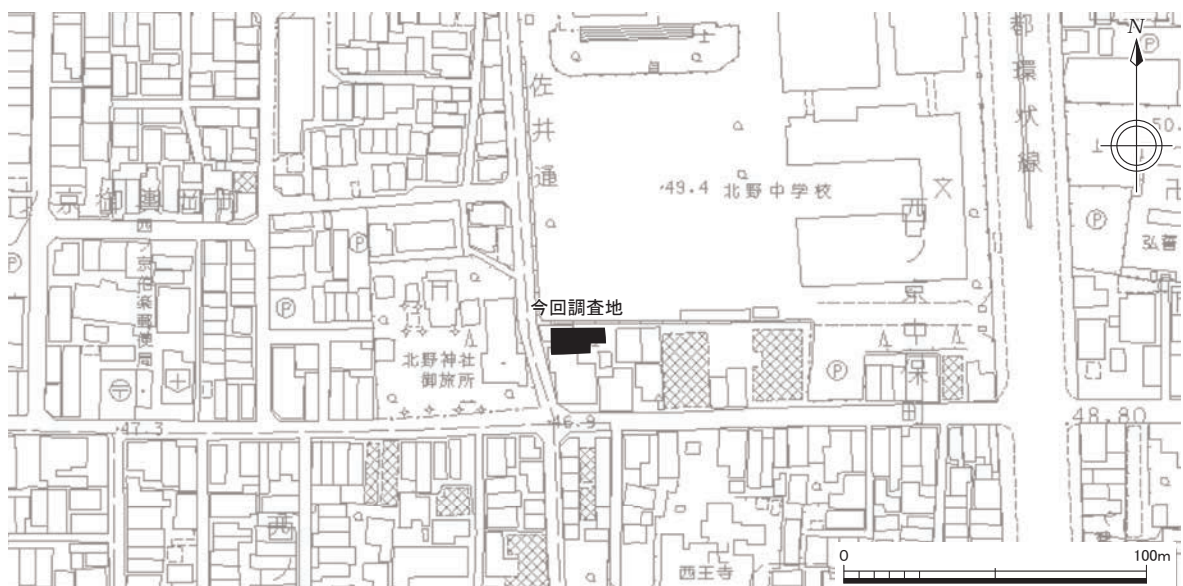


図1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査区設定（北東から）



2. 調査区内重機掘削作業・遺構検出作業（北東から）



3. 調査区内東側・西側南北断割作業（南東から）



4. 池003底面検出作業（北東から）



5. 泉002掘削作業（南東から）



6. 井戸017石組検出作業（南から）



7. 調査区内埋め戻し作業（北東から）



8. 調査完了後（北西から）

図2 調査経過写真



### 3 測量基準点の設置と地区割り (図3)

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にK. 1、K. 2を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

K. 1      X = -108,543.656 m      Y = -24,638.304 m      H = 46.939 m

K. 2      X = -108,541.149 m      Y = -24,623.603 m      H = 47.299 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3 mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

### 4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した望月、編集作業は中西が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

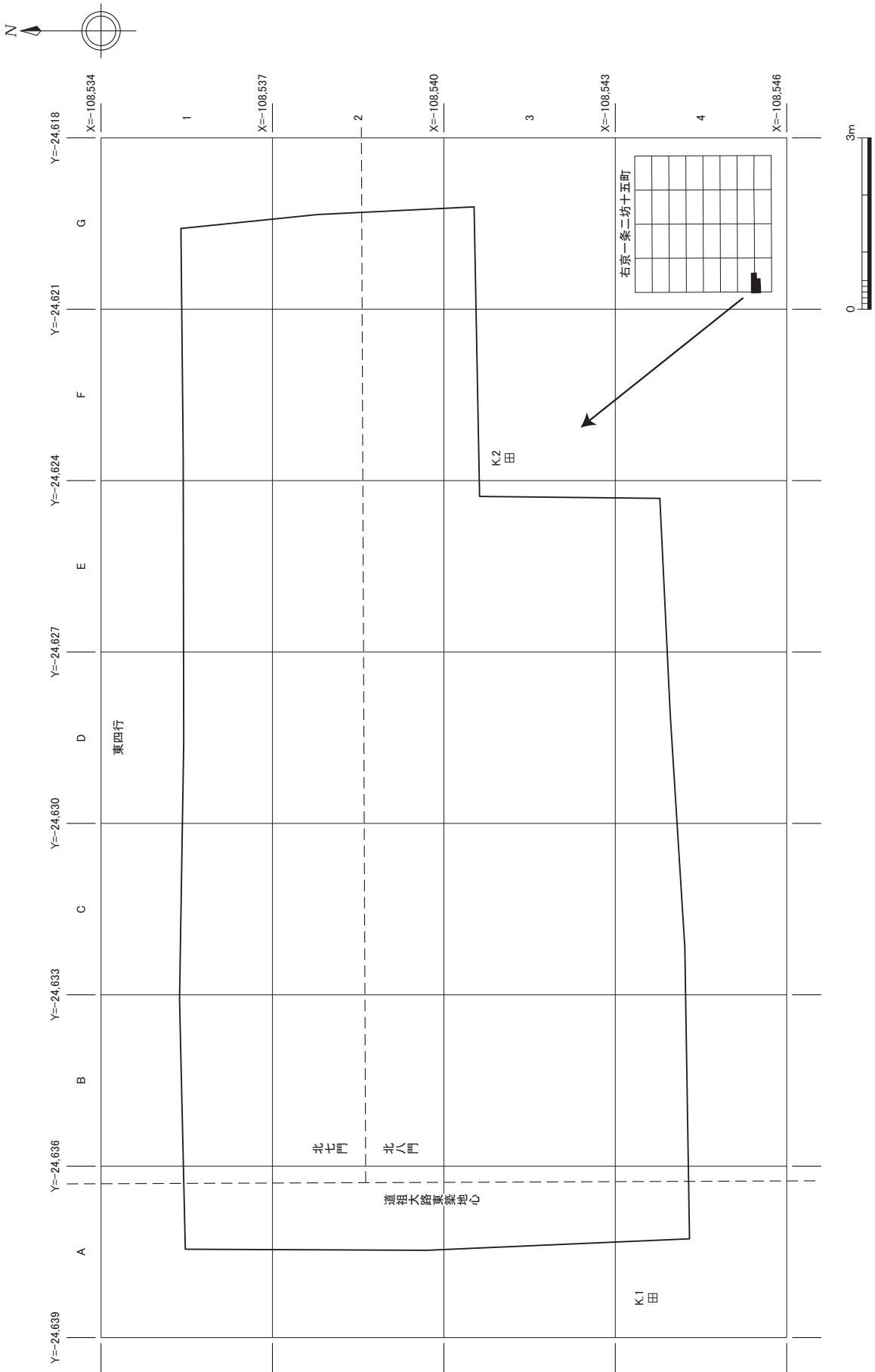


图3 調査区割・基準点配置図 (1:100)

## 第II章 位置と環境

### 1 位置と環境（図4）

調査地は佐井通と妙心寺道の交差点北東側に位置する。平安京の条坊では、右京一条二坊十五町の南西隅に該当し、四行八門制では東四行北七・八門となる。また、豊臣秀吉によって築造された御土居の土塁部分にも該当している。

当地の地理的環境は、京都盆地北部の北から南にかけて緩やかに傾斜する台地状地形上に立地している。地表面の標高は調査区の北東側で47.57m、南西側で47.0mを測る。この地形は、更新世の段階に紙屋川などの小河川が京都北部の丹波層群系山地を侵食し形成した扇状地が、低位段丘として発達したものである。

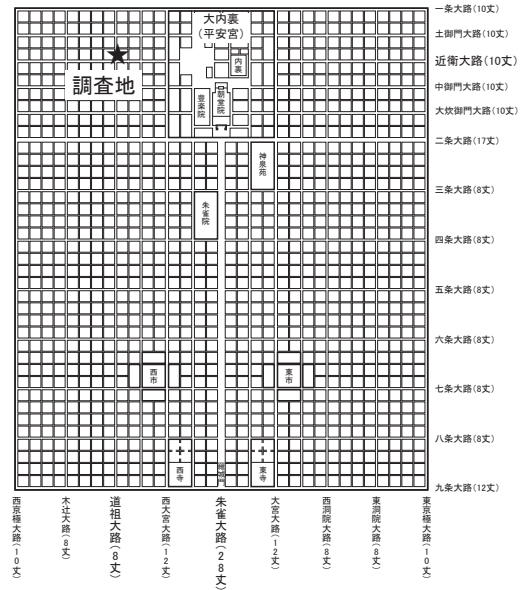


図4 平安京条坊図（1：80,000）

中世に成立した『捨芥抄』西京図によると、右京一条二坊十五町は空白地帯である。南隣的一条二坊十一・十三・十四町は「叙弘知行」と記載されているが、平安京内の西東に設置された獄舎の一つである右獄（西獄）が十二町には存在しており、その役人が管理していた私領であった。右獄は建久五（1194）年に左右獄囚を関東に送ったことに伴って廃獄になったと伝えられている。二条二坊十六町及び九・十町には「大將軍政所民部省」と記されている。もとは民部省の厨町であったが、平安時代後期になると諸司厨町は衰退し大將軍社領となるが、「民部省」の呼称が残った。当地より北西側に位置する北辺三坊五・六・七・八町は「左大臣融領」「宇多院」と記載されている。平安時代前期には左大臣源融の所領であったが、のちに宇多上皇の後院である「宇多院」に含まれた。その南側に位置する一条三坊九・十町では、平安時代初期の寝殿造の原型とされる大規模な掘立柱建物跡や門跡が確認されている。このことから、当地一帯は平安時代前・中期において貴族や官吏の宅地として興隆していたが、平安時代後期以降は大規模な宅地利用はされなくなり、公家や神社・寺院などの所領となっていたことが窺える。

また、西京の地は延喜三（903）年に大宰府で亡くなった菅原道真を祀るために創建された北野天満宮の領地であったことも知られている。西京一帯は北野天満宮に奉仕し、麴作りを生業としていた商工業者である「西京神人」の居住域として成立していた。西京神人は弘安七（1284）年の『勘仲記』にて北野祭に関する記事で史料上初めて登場し、北野天満宮と結びつくことで酒麴役とよばれる税を免除される代わりに、麴業の利益の一部を納め、神供調達を行っていた。西京神人の居住区は「保」という単位で組み分けられ、東西は七本松通から木辻通周辺まで、南北は三条通から一条通までを範囲とする西京神人の居住域に対し、二条通より北側が「七保（上下保）」、南側が

「二三条保」として大分された。七保はそれぞれの保に北野天満宮の御供所（七保社）が設けられ、当地の町名である「中保町」の由来も七保社のうち真中の四番目の保であったことに因む。当地の東側には病気平癒の御利益がある名水として信仰を集めていた四之保社跡威徳水が所在する。室町時代、足利氏の北野信仰は篤く、足利義持は西京神人の神役闕怠を防止するために、応永二十六（1419）年、造酒司の酒麴役の免除及び京都における麴の製造・販売の独占権を西京神人に付与した。これにより、西京以外で麴作りをしていた酒屋・土倉、特に比叡山延暦寺の山門配下の酒屋・土倉との対立が深まると、西京神人の麴業独占権を停止させるよう幕府に強訴し、西京神人はそれを認めさせないよう北野天満宮に閉籠した。両者の対立が激化し、文安元（1444）年に延暦寺山門の強訴が幕府に認められ、西京神人の麴業独占権の廃止が決定すると、西京神人はそれに反発し、北野天満宮に再び立て籠もった。管領畠山持国が鎮圧兵を向けると武力衝突が発生し、北野天満宮社殿及び西京一帯は焼け野原になった（文安の麴騒動）。これにより、西京神人は麴業の独占権がなくなり、この地の麴業は以後衰退してゆく。

安土・桃山時代になると、天下統一を果たした豊臣秀吉は京都の町に大規模な都市改造を行った。御土居もその一環である。天正十九（1591）年、外敵の来襲に備える防塁と、鴨川の氾濫から市街を守る堤防の役割を担うものとして土塁を築造し、その外側を濠で囲い、京の町を惣構化した。御土居の西境は鷹司小路以北まで紙屋川に沿って築造されているが、鷹司小路から春日小路の間は道祖大路まで凸状に張り出しており、春日小路以南は西堀川小路に沿って南下する。この突出部分は「御土居の袖」と呼ばれている。明治三十五（1902）年に作成された『實地測量京都市全圖』において、当地周辺の御土居の土塁は残存が認められるものの、大正四（1915）年の『京都近傍図』では土塁は確認されず、新たに佐井通が敷設されている。

#### 参考文献

- 大塚 隆『慶長昭和京都地図集成：1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』柏書房 1994年  
国土交通省国土政策局国土情報課『土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書 京都』2014年  
下中邦彦「京都市の地名」『日本歴史地名体系第二七巻』平凡社 1979年  
三枝暁子『日本中世の民衆世界—西京神人の千年』岩波書店 2022年  
山田邦和「第三章 左京と右京」『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年

## 2 既往の調査（図5・表1）

今回の調査地である一条二坊十五町内においては、これまでに調査が2件実施されている。北野中学校校舎建替工事に伴う発掘調査では、平安時代前期のピット・遺物包含層、鎌倉時代から室町時代の溝・土坑・柵列・柱穴、桃山時代の溝及び御土居濠の南肩が検出されている（20）。調査地から約40m東側で実施された立会調査では、平安時代前期の井戸と平安時代中・後期の濠状遺構の北肩が確認されている（21）。

調査地は平安京以前の遺跡には属していないが、当地より南側には弥生時代から古墳時代の遺跡である西ノ京遺跡、東側には古墳時代から奈良時代の集落遺跡である鳳瑞遺跡、北側には飛鳥時代に建立さ

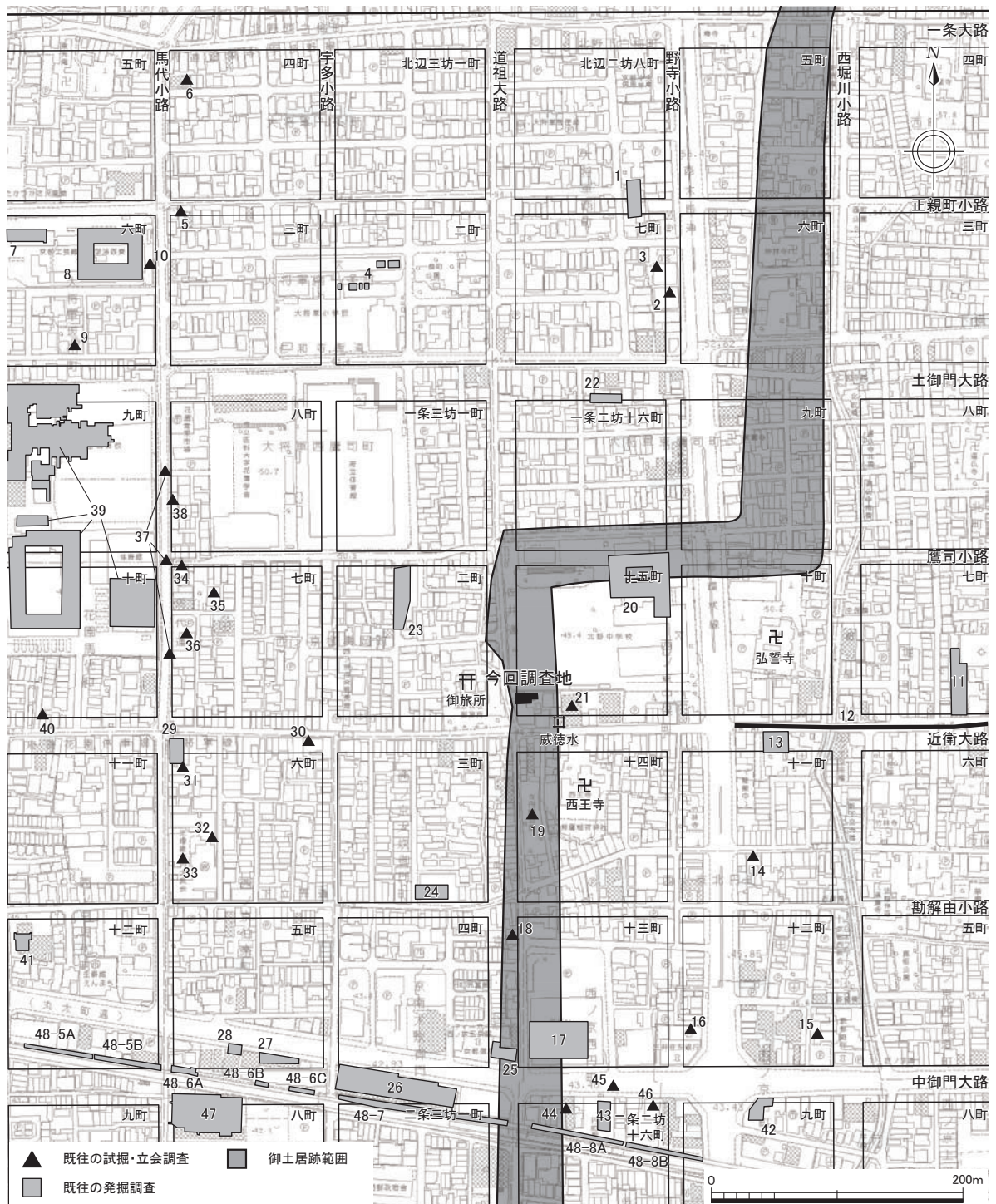


図5 既往調査位置図 (1 : 5,000)

れた北野廃寺及び弥生時代から室町時代の複合遺跡である北野遺跡が分布する。また、平安京以前に属する遺跡の範囲外となるが、調査地周辺の地点においても若干数の遺構が認められ、弥生・古墳時代の流路や溝が多数検出されている(1・4・14・22・27・28)。北辺三坊六町の発掘調査では飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑が見つかっており、北野廃寺との関連性が想起される(8)。一条三坊九・十町の発掘調査では古墳時代から奈良時代の掘立柱建物と溝が確認されている(39)。

平安時代前・中期になると、調査地周辺では多数の遺構が認められるようになる。北辺二坊七町の立会調査では野寺小路に伴う路面や南北側溝、井戸などが検出されており(2・3)、北辺二坊

八町の発掘調査では正親町小路南側溝や建物跡などが見つかった(1)。宇多院が所在していたとされる北辺三坊六町の発掘調査では小規模な建物跡の他、全国的にも出土が稀な越州窯系青磁唾壺を埋納した土坑が確認されている(8)。一条二坊十一・十二町の試掘・立会調査では、長年大寶・承和昌寶・隆平永寶が出土した区画溝(14)や門扉などの開閉の為に肘金と併せて用いられる肘壺と想定される金属製品が出土した区画溝が建物跡と共に検出されている(15)。一条二坊十三町の発掘調査では庇付建物跡や井戸、園池遺構が確認されており(17)、諸司厨町として発達していた様子が窺える。一条二坊十六町の発掘調査では土御門大路南側溝及び南築地に伴う柵列が検出された他、平安時代初頭の二彩多口瓶が出土している(22)。一条三坊二町の発掘調査では鷹司小路南側溝と建物跡に加え、町内通路(小径)や橋脚跡が検出されており、小径東側溝からは墨書土器が出土している(23)。一条三坊三町の発掘調査では庇付の大規模な掘立柱建物が見つかり(24)、一条三坊五町の発掘調査では建物跡・柵列の他、延喜通寶や鉄製鋏先が埋納された祭祀土坑が検出されており(27)、JR山陰本線部分の発掘調査では、中御門大路北築地内溝が確認されている(48-6A)。一条三坊九・十町の発掘調査では寝殿造の原型とされる大規模な掘立柱建物跡や鷹司小路に伴う門跡・南北側溝が確認されている(39)。二条二坊十六町の発掘調査では野寺小路西側溝が見つかり(48-8B)、二条三坊八町の花園大学キャンパス内で行われた発掘調査では、建物跡や井戸、柵列などが検出されている(47)。

平安時代後期以降、右京域は衰退し耕作地化が進んだとされる。調査地周辺においても宅地関連の遺構は急激に認められなくなるが、一条二坊七町の発掘調査では小規模な建物跡や柵列が検出されている(11)。鎌倉時代になると耕作関連の遺構が多数認められるようになるが(1・4・8・17・25・26・28・29・41・42・48-5~7)、室町時代以降、宅地関連の遺構や遺物の量が再び増加する。北辺二坊八町の発掘調査では正親町小路南側溝付近に東西柱列が確認されている(1)。北辺三坊六町の発掘調査では掘立柱建物群や石組井戸が検出されており(7・8)、井戸は底部に天端を揃えて景石が2石据えられ、室町時代において京都市内最大級の規模を誇る(8)。一条二坊十三町の発掘調査では東西柵列や溝状遺構が認められ、埋土中より室町時代後半の土器・陶磁器が多量に出土した(17)。一条三坊二町の発掘調査においては断面が逆台形を呈する東西方向の堀が検出されており、「構え」の性格を有していたものと推測される(23)。応仁元(1467)年に建造されたと伝えられる西京神人・川合家住宅の解体工事に伴う発掘調査においては、応仁・文明の乱に関わる堀跡が埋められた後に旧川合家住宅と想定される掘立柱建物跡が検出されている(13)。

御土居に対する調査としては、一条二坊十三・十四・十五町、一条三坊四町、二条三坊一町の調査において関連する遺構が認められている。調査地より北東側の北野中学校校地内の調査では御土居濠の南肩が確認されており、校地内には現在も土塁の一部が残存している(20)。当地より約9m南側で行われた一条二坊十四町の立会調査では土塁基底部(21)が検出されている。一条二坊十三町の発掘調査では土塁基底部及び濠の東肩が検出されており(17)、隣接する一条三坊四町の発掘調査では石による護岸が施された濠の東肩が確認されている(25)。二条二坊十六町での発掘調査では土塁内溝が見つかった(48-8A)。

表 1 既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	北辺二坊七・八町、 正親町小路	発掘	飛鳥時代の流路、平安時代前・中期の正親町小路 南側溝・掘立柱建物・土坑・溝、室町時代の流路・ 柱列・溝・土坑、近世以降の流路・土坑・溝を検出。	『平安京右京北辺二坊八町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-18 埋文研 2013年
2	北辺二坊七町、 野寺小路	立会	平安時代前期の野寺小路の路面・南北側溝、井戸・ 土坑を検出。	『II-5 右京北辺二坊七町』『京都市 内遺跡立会調査概報平成6年度』 京都市文化観光局 1995年
3	北辺二坊七町	立会	平安時代中期の井戸を検出。	『4 平安京右京北辺二坊七町 (08HR122)』『京都市内遺跡立会調 査報告平成20年度』京都市文化市 民局 2009年
4	北辺三坊二町	発掘	弥生時代の溝、平安時代の井戸・落込み・溝・湿 地状遺構・遺物包含層、中世の柵列・溝・落込み を検出。	『30 平安京右京北辺三坊二町』『昭 和54年度京都市埋蔵文化財調査概 要』埋文研 2012年
5	北辺三坊三町	立会	平安時代前期の土坑・遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
6	北辺三坊四町	立会	平安時代後期の整地層、室町時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成8 年度』京都市文化市民局 1997年
7	北辺三坊六町	発掘	平安時代後期の恵止利小路東側溝、室町時代の掘 立柱建物を検出。	『21 右京北辺三坊(2)』『昭和56年 度京都市埋蔵文化財調査概要(発 掘調査編)』埋文研 1983年
8	北辺三坊六町	発掘	飛鳥時代～奈良時代の堅穴建物・掘立柱建物・溝・ 土坑、平安時代の掘立柱建物・唾壺埋納遺構・土 坑・柱穴、鎌倉時代～室町時代前期の耕作溝、室 町時代後期の掘立柱建物・塀・柱列・井戸・土坑 を検出。	『平安京右京北辺三坊六町跡』京都 市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-14 埋文研 2014年
9	北辺三坊六町	立会	室町時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成4 年度』京都市文化観光局 1993年
10	北辺三坊六町	詳細分布	室町時代の馬代小路に伴う西側築地内溝を検出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
11	一条二坊七町	発掘	平安時代後期の掘立柱建物・柵列・溝・土坑・ピッ ト、江戸時代の土坑を検出。	『平安京右京一条二坊七町跡』京都 市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-31 埋文研 2007年
12	近衛大路	立会	平安時代～鎌倉時代の近衛大路路面整地層を検出。	『4 平安京右京一条二坊 近衛大路 (97HR162)』『京都市内遺跡立会調 査概報平成9年度』京都市文化市 民局 1998年
13	一条二坊十一町	発掘	室町時代の堀・旧川井家住宅に伴う掘立柱建物 跡、安土・桃山時代から明治時代の旧川井家住宅 に伴う礎石建物跡、江戸時代末期の麴土土壁廃棄 土坑・火炉・埋桶・胞衣壺・トイレ遺構を検出。	『平安京右京一条二坊十一町跡発掘 調査終了報告書』古代文化調査会 2020年 ※京都市文化財保護課提供
14	一条二坊十一町	試掘	古墳時代後期の溝、平安時代中期の溝・土坑、室 町時代の土坑・柱穴を検出。	『右京一条二坊試掘調査(No.559)』 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市文化観光局 1980年
15	一条二坊十二町	立会	平安時代前期の溝・掘立柱建物を検出。	『3 平安京右京一条二坊十二町 (96HR285)』『京都市内遺跡立会調 査概報平成8年度』京都市文化市 民局 1997年
16	一条二坊十二町	立会	平安時代中期の土坑・遺物包含層、時期不明の土 坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
17	一条二坊十三町、 御土居跡	発掘	平安時代以前の湿地状堆積、平安時代の土坑・井 戸・柱穴・池・落込、室町時代の溝・柱穴・落込・ 耕作土層、桃山時代～江戸時代の溝・柱穴・柵列・ 御土居の土塁基底部を検出。	『6 平安京右京一条二坊』『平成11 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 埋文研 2002年
18	道祖大路、御土居跡	立会	道祖大路川東岸部を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1982年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
19	一条二坊十四町、御土居跡	試掘	御土居の土塁基底部を検出。	「IV-1 平安京右京一条二坊十四町跡、御土居跡」『京都市内遺跡試掘調査報告平成30年度』京都市文化市民局 2019年
20	一条二坊十五町、鷹司小路、御土居跡	発掘	平安時代前期のピット・遺物包含層、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・柵列・柱穴、桃山時代の溝・御土居濠の南肩を検出。	「17 平安京右京一条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991年
21	一条二坊十五町	立会	平安時代前期の井戸、平安時代中・後期の濠状遺構を検出。	「5 平安京右京一条二坊十五町(98HL89)」『京都市内遺跡立会調査概報平成10年度』京都市文化市民局 1999年
22	一条二坊十六町	発掘	古墳時代の流路、平安時代初頭の柱列・土坑、平安時代中期の土御門大路南側溝及び南築地に伴う柵・柱列・溝・土坑、中世の耕作溝を検出。平安時代初頭の土坑より二彩多口瓶が出土。	『平安京右京一条二坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-1 埋文研 2019年
23	一条三坊二町	発掘	平安時代の鷹司小路南側溝・区画溝・小径・橋脚跡・祭祀遺構・掘立柱建物・土坑、中世の溝、近世以降の溝・土坑を検出。	「10 平安京右京一条三坊」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1998年
24	一条三坊三町	発掘	平安時代中期の掘立柱建物・柵列・土坑などを検出。	『平安京右京一条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-21 埋文研 2007年
25	一条三坊四町、道祖大路、御土居跡	発掘	鎌倉時代～室町時代の道祖大路川・溝・土坑、御土居濠を検出。	『平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第26集 株式会社文化財サービス 2022年
26	一条三坊四町、宇多小路、中御門大路	発掘	平安時代前・中期の中御門大路北側溝、平安時代中期の井戸・流路、中世の中御門大路北側溝・耕作溝を検出。	「28 平安京右京一条三坊四町」『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
27	一条三坊五町	発掘	弥生時代の溝、平安時代中期の掘立柱建物・柵列・溝・祭祀土坑・ピット、平安時代中期以降の掘立柱建物・柵列・溝・ピットを検出。	「22 右京一条三坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』埋文研 1983年
28	一条三坊五町	発掘	古墳時代の溝、平安時代の掘立柱建物・柱穴・土坑、室町時代の暗渠、江戸時代の溝を検出。	「17 右京一条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1984年
29	一条三坊六町、近衛大路、馬代小路	発掘	室町時代の溝・小堤状遺構・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊六町跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第14集 株式会社文化財サービス 2021年
30	近衛大路	立会	時期不明の土坑、平安時代前期の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
31	一条三坊六町	立会	平安時代前期の土坑、時期不明の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
32	一条三坊六町	立会	平安時代の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成3年度』京都市文化観光局 1992年
33	一条三坊六町	試掘	平安時代の湿地堆積を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成3年度』京都市文化観光局 1992年
34	一条三坊七町	立会	平安時代中期の溝を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
35	一条三坊七町	立会	平安時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
36	一条三坊七町	立会	平安時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度』京都市文化観光局 1991年



	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
37	一条三坊七・八町、馬代小路	立会	平安時代中期の溝・柱穴・土坑・遺物包含層を検出。	「10 平安京右京一条三・四坊・五位山古墳」『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 埋文研 1997年
38	一条三坊八町	立会	奈良時代～平安時代前期の溝を検出。	「右京一条三坊跡試掘調査 (No. 524)」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』京都市文化観光局 1980年
39	一条三坊九・十町、鷹司小路	発掘	古墳時代～奈良時代の掘立柱建物・溝、平安時代初頭～前期の門跡・掘立柱建物・溝・土坑・井戸、平安時代中期の掘立柱建物・柵列を検出。	「平安京跡右京一条三坊九・十町の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第73号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年
40	一条三坊十町、近衛大路	立会	近衛大路北側溝を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
41	一条三坊十二町	発掘	平安時代の溝・柵列、中近世の池、近世の耕作溝・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊九町発掘調査報告』関西文化財調査会 1997年
42	二条二坊九町、中御門大路	発掘	平安時代前・中期の土坑、中世以降の土坑を検出。	『平安京右京二条二坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-18 埋文研 2009年
43	二条二坊十六町、中御門大路	発掘	平安時代の柱穴・土坑・溝・井戸を検出。	『平安京右京二条二坊十六町』京都文化博物館調査研究報告第14集 京都文化博物館 2000年
44	二条二坊十六町	立会	平安時代後期の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成14年度』京都市文化市民局 2002年
45	中御門大路	立会	始良 Tn 火山灰層検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』京都市文化市民局 1999年
46	二条二坊十六町	立会	始良 Tn 火山灰層検出。	『京都市内遺跡立会調査概報平成11年度』京都市文化市民局 1999年
47	二条三坊八町、中御門大路	発掘	平安時代の掘立柱建物・柵列・溝・土坑・井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸、江戸時代の土坑を検出。また、調査区西側拡張にて馬代小路東側溝の可能性のある溝を検出。	『平安京右京二条三坊八町 附 平安京右京一条四坊一・二町』花園大学構内調査報告Ⅶ 花園大学 2010年
48	一条三坊五町・十二町、二条三坊一町、二条二坊八・九・十六町、馬代小路、道祖大路、野寺小路、中御門大路、御土居跡	発掘	一条三坊十二町にあたる5A・5B区にて平安時代前期の園池・溝、平安時代中期の井戸・溝・柵列・柱穴、室町時代～江戸時代の耕作土層、一条三坊五町にあたる6A～6C区にて平安時代中期の中御門大路北築地内溝、平安時代後期の流路、室町時代の耕作溝、二条三坊一町にあたる7区にて平安時代中期の道祖大路西側溝・柱穴、室町時代の柱穴、室町時代から江戸時代の耕作溝を検出。二条二坊十六町にあたる8A・8B区にて平安時代前期の井戸、平安時代中期の井戸・野寺小路西側溝、御土居の土塁内溝を検出。	「1 平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年

埋文研→公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

## 第三章 調査成果

### 1 基本層序（図6・7・8）

調査地における現標高は、北東側で47.57m、南西側で47.0mと、北東から南西の方向に向かって低くなっている。当地の基本層序は、現代土、御土居構築土、御土居構築以前の遺構検出面である基盤層によって構成される。

現代土は調査区北東側にて地表面より0.2～0.3m、調査区南東側にて地表面より0.5m、調査区西側にて0.6～0.9mの層厚で堆積し、煉瓦・コンクリート片・塩ビ管・近現代の陶磁器などを包含する。調査区の南壁際と北西隅は既存建物基礎の攪乱によって遺構面が削平されている。

御土居構築土は調査区中央西寄りにおいて土塁基底部分が僅かに残存していた。当該層は試掘坑南面のみでしか確認されず、室町時代前半に帰属する土坑010の直上に0.32mの層厚で残存していた。今回の調査では調査区全域において御土居土塁の検出が期待されたが、後世の削平により一部分のみでしか認められなかった。

御土居構築以前の遺構は全て基盤層上面にて検出した。基盤層検出面の標高は、調査区北壁際において東側が47.2m、西側が46.9m、調査区中央部において東側が46.8m、西側が46.5mを測り、原地形が東から西に向かって0.3m傾斜しているのがわかる。基盤層最上層である褐色シルト層は粘性が強く、マンガン斑を含み赤みを帯びる。当該層は調査区北壁においてY=-24,623.8～-24,626.6の間が最も高く、標高47.3mの段階で検出されたが、その地点より西側になると緩やかに傾斜する。褐色シルト層より下は黄灰色～暗灰黄色砂礫層と灰白色シルト層が互層になって堆積している。また、南北断割の断面観察により、X=-108,537の地点にて褐色砂礫層及び灰白色～黄褐色シルト層より上の堆積層が0.2mの深さで落ち込んでいるのが認められた。D・E-2・3の範囲で灰黄褐色砂礫層が0.5mの層厚で堆積し、X=-108,542より南側にて再び堆積が浅くなる。泉と井戸が検出されている地区もここであるため、この原地形が紙屋川の旧河道によって形成された小溪谷状のものであり、堆積した砂礫層が湧水層の役割を果たしていたと考えられる。

### 2 検出遺構（図9・表2）

今回の調査では、南北朝期から御土居構築以前の泉・池・井戸・土坑・溝、御土居土塁を検出した。なお、御土居の土塁構築土は後世に削平されており、調査区中央部西側にて僅かに残存しているのみであった。

表2 遺構概要表

検出した遺構の総数：17

時代	主な検出遺構	備考
南北朝期～ 安土・桃山時代	池 003、泉 002、井戸 017、柱穴 009、土坑 001・010・011、 溝 013・014、御土居土塁	

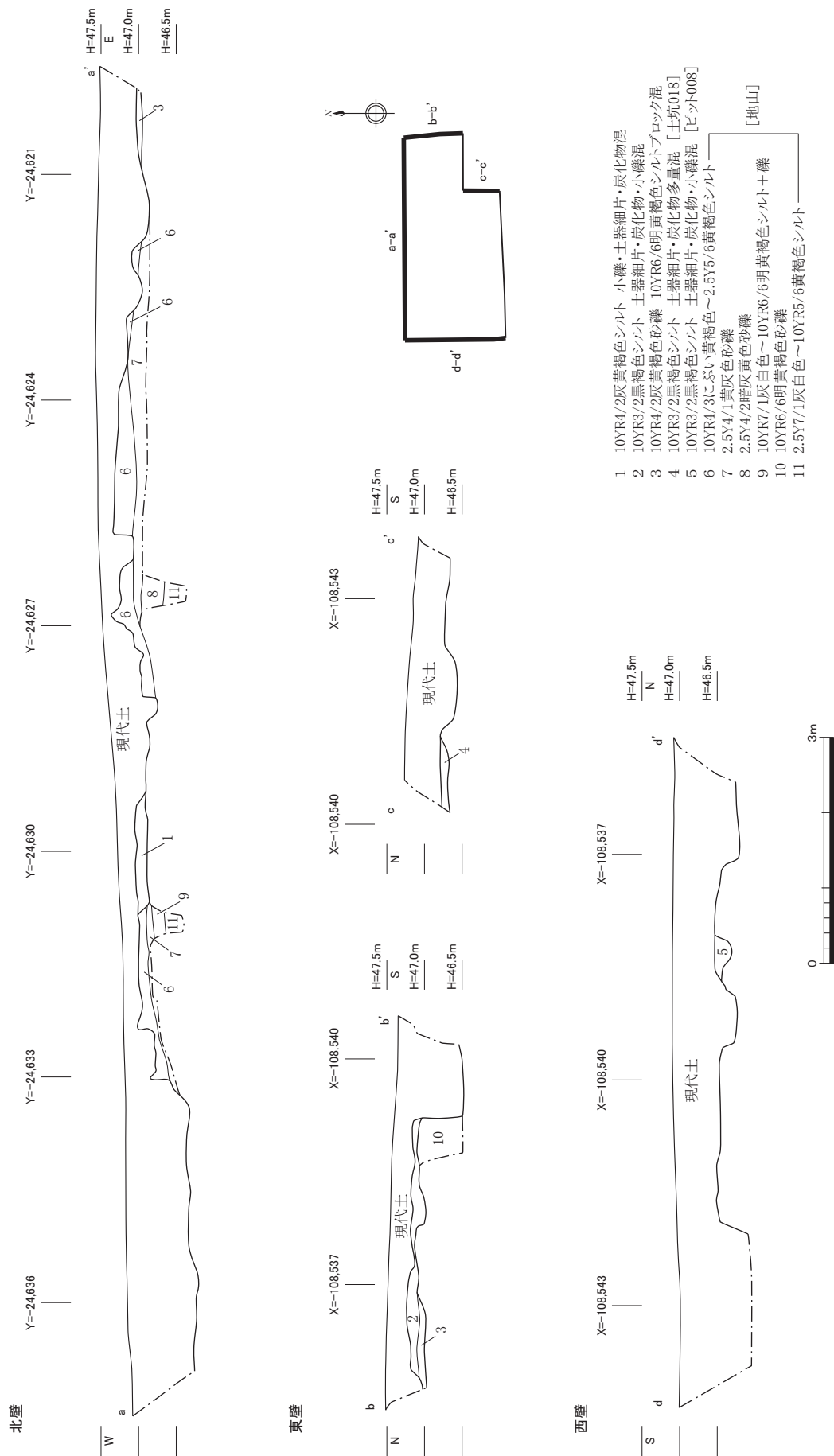


図6 調査区東壁・北壁・西壁断面図 (1:80)

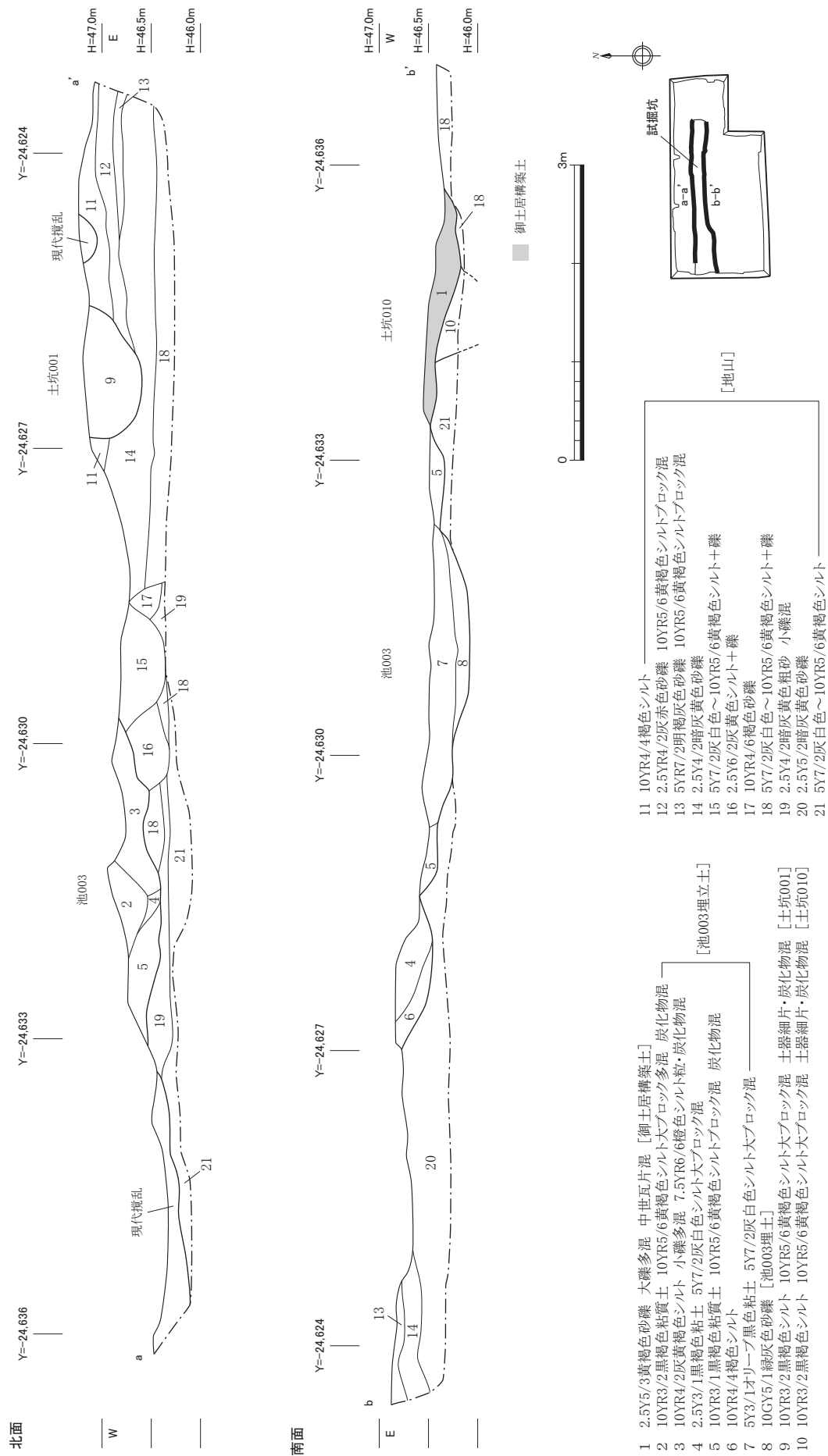


図7 調査区試掘坑北面・南面断面図 (1 : 60)

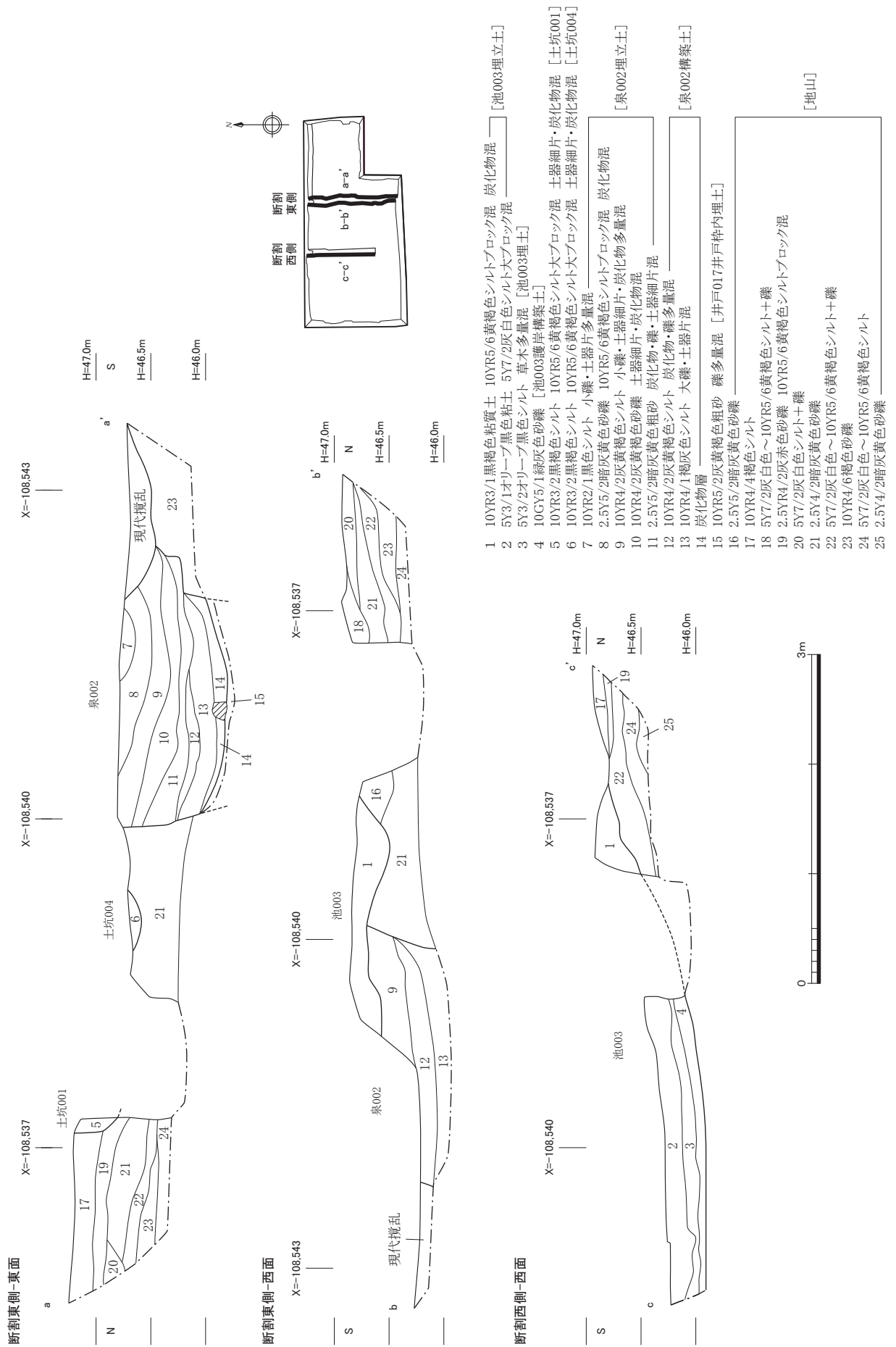


図8 調査区東側・西側南北断面断面図 (1:50)

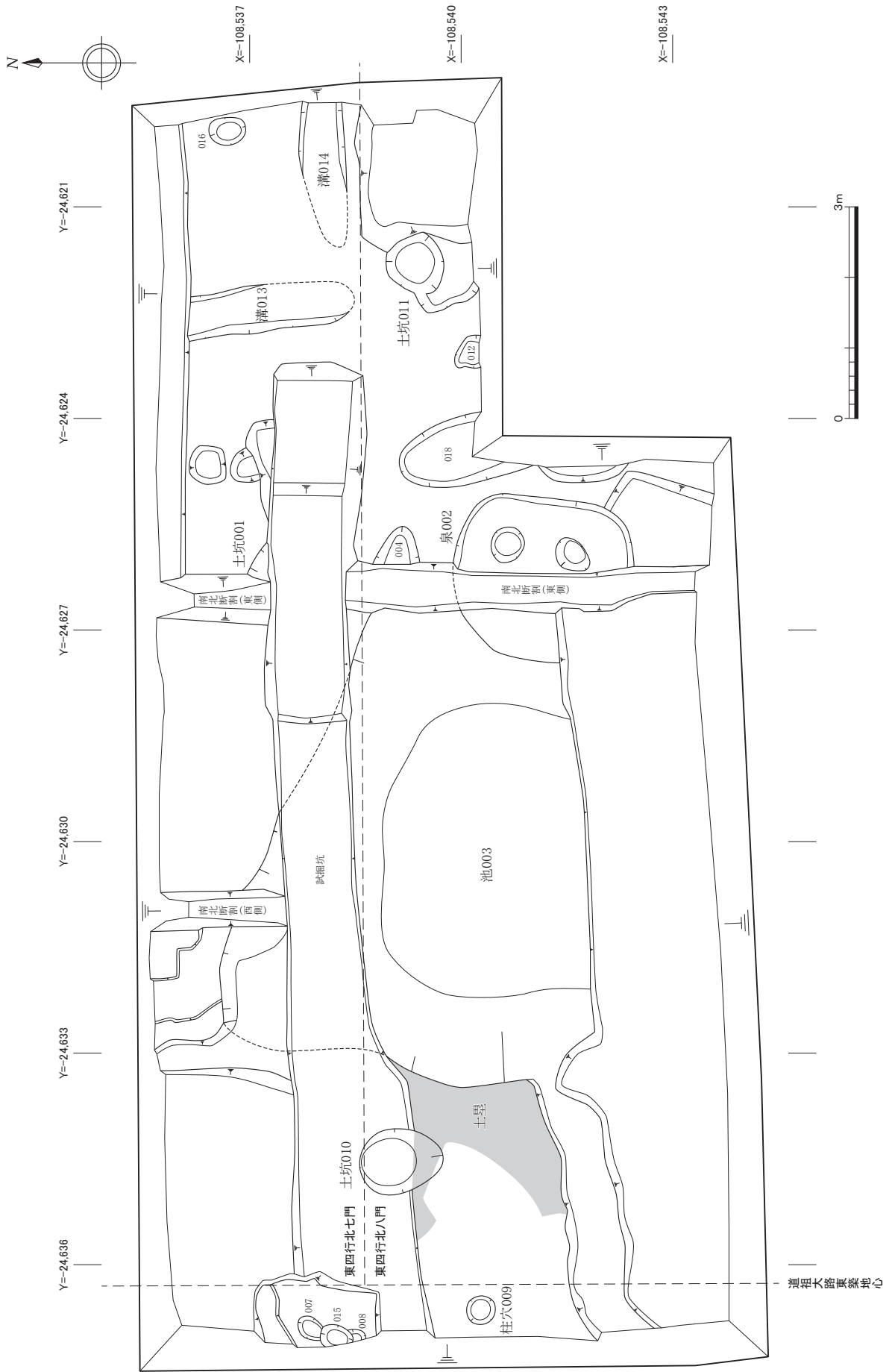


図9 調査区全体平面図 (1 : 80)

## 御土居土塁（図7）

調査区中央部西寄りにて幅約2.6mの帯状に検出した。中世瓦片を含む黄褐色砂礫層で、室町時代前半に帰属する土坑010の直上に0.32mの層厚で堆積している。検出面の標高は46.55m、底面の標高は46.2m。後世の削平により構築土がほぼ失われていたので、土塁の構築方法の復元は出来なかった。

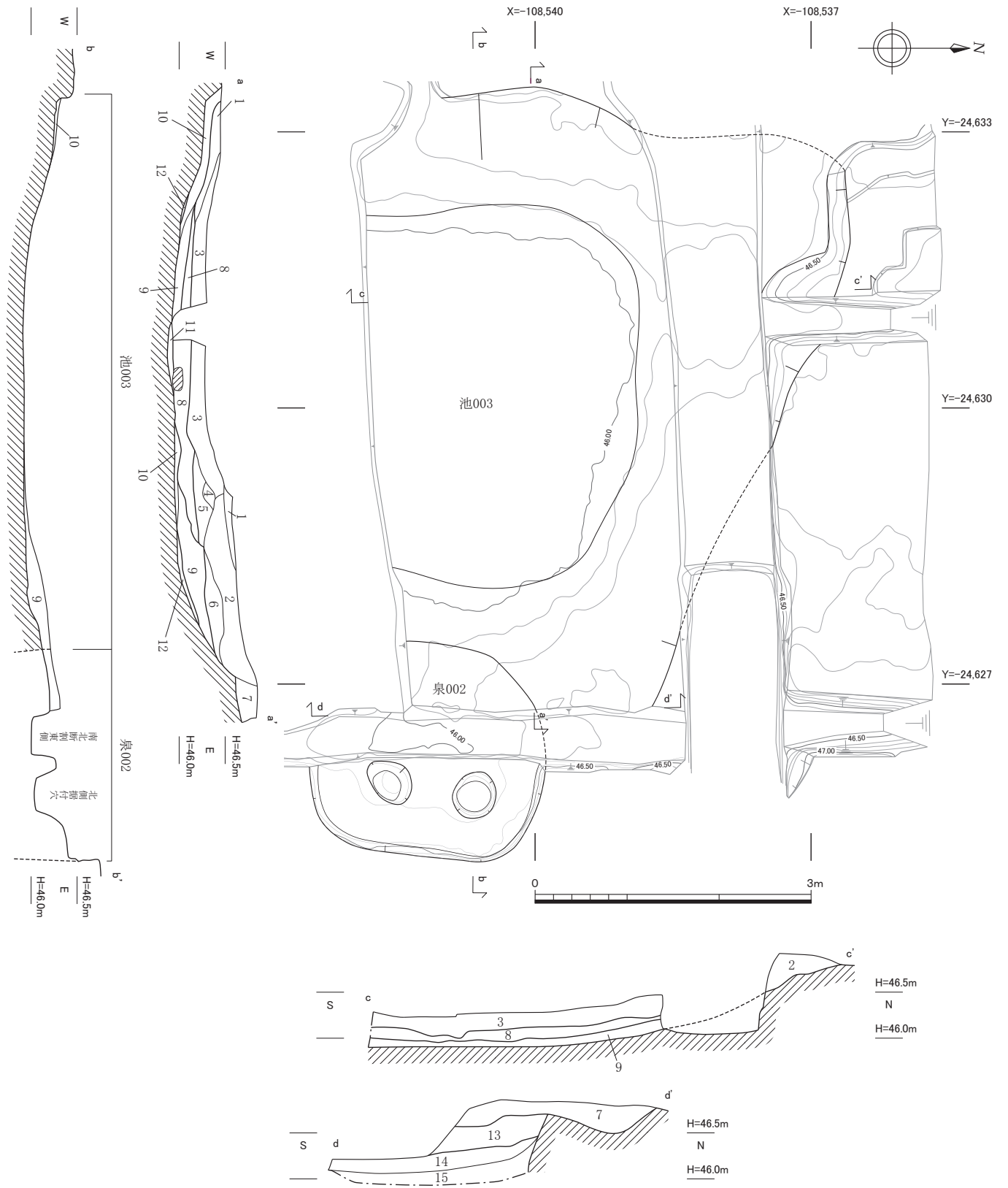
## 池003（図10・11、図版3-1・2、4-1）

調査区の南側で検出した。東側にて泉002と接続し、検出規模は東西約6.8m、南北約5.3m、深さ0.58～0.97mを測る。池の北半部のみ検出したが、南半部は調査区外南に広がると推測される。州浜や景石は見当たらなかったが、標高46.3mの段階にて緑灰色～黄灰色砂礫層が池の汀から中心部にかけて緩やかに傾斜しながら堆積しているのを確認した。汀の護岸と考えられる。護岸の構築土の層厚は、西側が0.1m、東側が0.3mで、泉002と接する東側の方が厚く堆積していた。池の東側は泉の構築によって地山面が西側より0.1m削平されていることから、池の西汀と高さを揃えるために盛土することによって、泉から湧き出た水を池の中心部へと流すためと推測される。護岸構築土からは室町時代前半の所産とみられる土師器皿の細片が出土しており、泉002と同時期に成立したものと考えられる。当該層を除去したところ、底面に部分的に細礫混じりの黒褐色シルトが貼り付けられているのを確認した。底部標高は45.9mを測る。池の埋土は上層と下層で様相が異なり、埋土上層は上位が固く締まった礫混じりの黒褐色粘土、下位が巨大な灰白色シルトブロックが多量に混入するオリーブ黒色粘土からなる。この埋土は人為的に埋め立てられ、地盤沈下を防止するために、密度の高い灰白色シルトのブロックを単位毎に充填し、その間隙にオリーブ黒色粘土を流し込んでいた。安土・桃山時代の土師器皿や備前播鉢、天目茶碗が出土していることから、御土居構築時に埋め立てられたものと推測される。埋土下層はオリーブ黒色シルトを呈する。滞水によって池底に堆積していた植物によって形成された腐植土が有機質泥層化したもので、池の機能期に形成されたものと考えられる。この層は標高46.15mの段階で確認されたことから、当時の池の水位は少なくともこの高さまで来ていたと推測される。上層と下層の間には枝葉・竹材・丸木などが敷き詰められており、同じく圧密沈下を防ぐために用いられた敷葉工法の痕跡と考えられる。この材を試料に樹種同定を行ったところ、アカガシ・エゴノキ・クリ・マダケであることが判明した。また、埋土下層に含まれる種実の同定と花粉分析を実施した。結果として、アラカシ・アカガシ・サカキなどの常緑広葉樹系の種実や、キイチゴ属やキジムシロ属といったイチゴ類、スゲ属といった湿地性植物果実、イネ科、メロン類などの植物化石、マツ属・ムクノキ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・イネ科・バラ科・カヤツリグサ科・ガマ属・アカウキクサ属・オオバコ属・ソバ属などの花粉が検出された（附章掲載）。このことから、埋土下層が堆積した段階における調査地の植生はアカマツやアカガシ、ムクノキなどが生い茂る二次林的な様相をしていたと考えられる。池内には水生植物であるアカウキクサが繁茂し、その周囲にはガマ属やスゲ属といった湿地性植物が生育していたとみられる。また、サカキやエゴノキといった庭木、オオバコといった人の踏みつけに強い雑草も生息しており、庭園的な特徴も認められる。当地における草本類の花粉の検出が



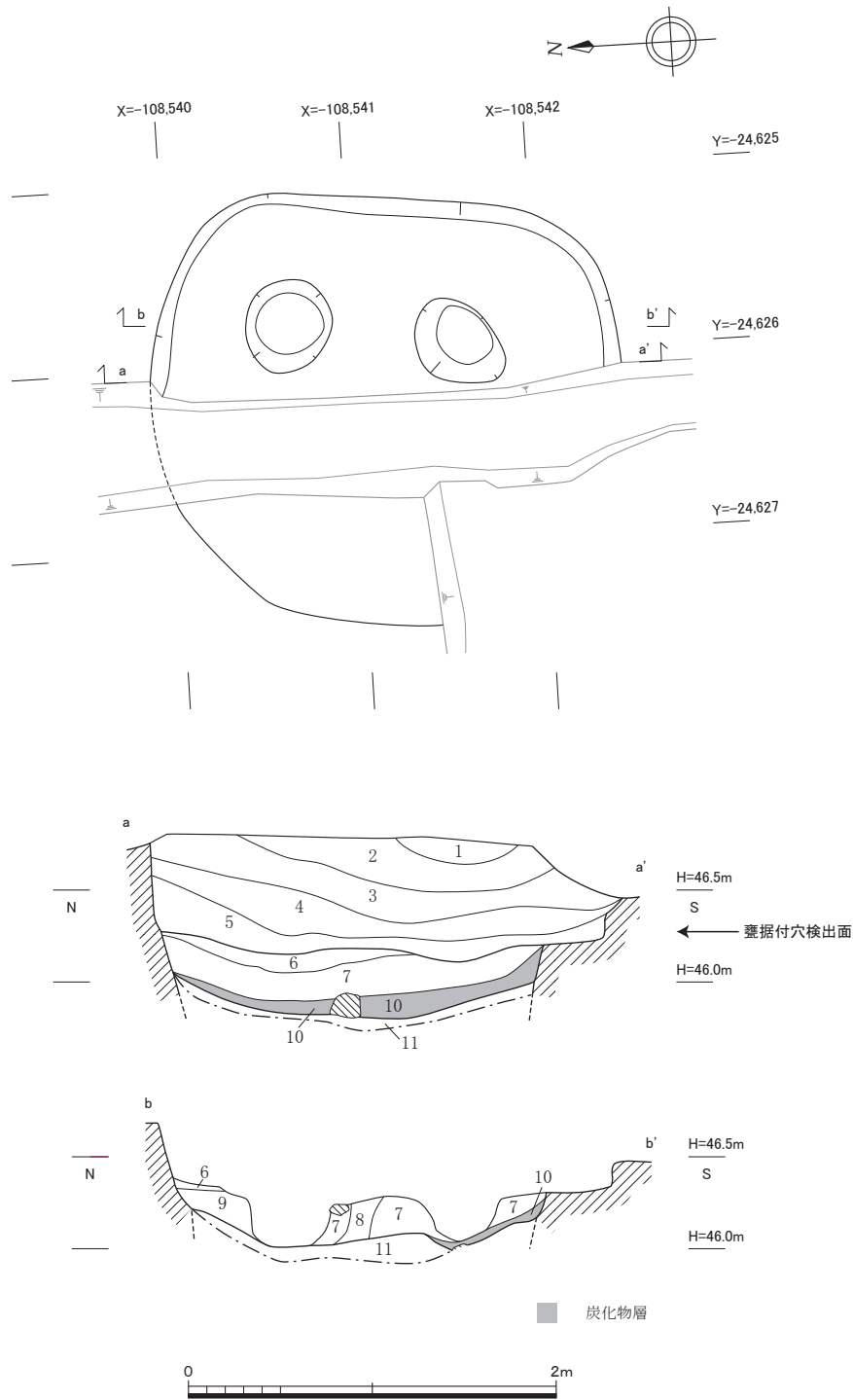
图10 池003埋土除去後平面図 (1 : 50)





- |   |   |                                       |
|---|---|---------------------------------------|
| <p>1 10YR3/2黒褐色粘質土 10YR5/8黄褐色シルトブロック・小礫・土器片多量混</p> <p>2 10YR3/1黒褐色粘質土 10YR5/6黄褐色シルトブロック・炭化物混</p> <p>3 5Y3/1オリーブ黒色粘土 5Y7/2灰白色シルト大ブロック多量混</p> <p>4 2.5Y3/2黒褐色シルト</p> <p>5 2.5Y3/1黒褐色粘土 5Y7/2灰白色シルトブロック礫少量混</p> <p>6 2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y7/2灰白色シルト大ブロック・土器細片・炭化物混</p> <p>7 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫 2.5Y6/6明黄褐色シルト小ブロック混</p> <p>8 5Y3/2オリーブ黒色シルト 植物遺体・種子多量混[池003埋土]</p> | <p>9 10GY5/1緑灰色粗砂 礫多量混</p> <p>10 10YR5/2灰黄褐色砂礫</p> <p>11 2.5Y4/1黄灰色~7.5GY4/1暗緑灰色中砂+礫</p> <p>12 2.5Y4/1黄灰色中砂+礫</p> <p>13 10YR4/2灰黄褐色シルト 小礫・土器細片・炭化物多量混 [泉002埋立土]</p> <p>14 10YR4/2灰黄褐色砂礫 土器細片・炭化物混</p> <p>15 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物・礫多量混 [泉002構築土]</p> | <p>[池003護岸構築土]</p> <p>[池003底面貼付土]</p> |
|---|---|---------------------------------------|

図11 池003完掘状況平面・断面図（1：60）



- |    |   |           |
|----|---|-----------|
| 1  | 10YR2/1 黑色シルト 小礫・土器片多量混                 | [泉002埋立土] |
| 2  | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 10YR5/6 黄褐色シルトブロック混 炭化物混 |           |
| 3  | 10YR4/2 灰黄褐色シルト 小礫・土器細片・炭化物多量混          |           |
| 4  | 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 土器細片・炭化物混                |           |
| 5  | 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 炭化物・礫・土器細片混              | [泉002構築土] |
| 6  | 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物・礫多量混                |           |
| 7  | 10YR4/1 褐灰色シルト 大礫・土器片混                  |           |
| 8  | 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 小石多量混                     |           |
| 9  | 10YR3/4 暗褐色砂礫 大礫多量混                     |           |
| 10 | 炭化物層                                    |           |
| 11 | 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 礫多量混 [井戸017井戸枠内埋土]       |           |

図12 泉002平面・断面図 (1 : 40)

相対的に少ないことから、一定の管理された場所であったことが想定できる。栽培地近辺でしか産出されないツバ属の花粉が検出されていることも特筆すべき点である。敷葉工法に用いられた木材は周囲に生育していた樹木が伐採されたもので、埋立ての際に投棄されたものと考えられる。池底より花崗岩製礎石が出土しており、当地付近にて礎石建物が存在したことを窺わせる。

#### 泉002（図12、図版4-1・2、5-1・2）

調査区の南東側にて検出した。池003の北東に接する。掘方の平面形は隅丸形状を呈し、検出規模は南北約2.5m、東西約2.3m、深さ0.96mを測る。検出面より0.50mの深さにて、鎌倉時代後半の常滑産大甕の破片を多量に含んだ穴を南北方向に2基並んで検出した。穴の径は0.40～0.55mで、大甕の据付穴と考えられる。据付穴の底面には木炭化した細木を敷き詰めた炭化物層が堆積しており、湧水の浄化のために敷かれたものと想定される。炭化物層を樹種同定した結果、ネジキ・マツ属・コナラ属などの雑木が用いられていた（附章掲載）。大甕は底部が打ち欠かれており、底面の炭化物層からの湧水を甕内に溜め、甕口から水を掬うために用いられた可能性がある。底面の標高は46.0mを測る。据付穴上面の埋土は小礫・炭化物混じりの暗灰黄色～灰黄褐色の砂礫層とシルト層が互層となっており、その中より安土・桃山時代の備前茶陶が出土した。大甕据付穴の掘方埋土は礫混じりの灰黄褐色～褐灰色シルト層及び暗褐色砂礫層で、掘方埋土及び炭化物層より南北朝期から室町時代前半の土師器皿や瓦質土器羽釜が出土している。このことから、この泉は室町時代前半の段階に成立し、池003と同様、御土居構築時に埋め立てられたものと考えられる。池003と接続する泉の西側は、池の東汀の護岸構築土上面にて掘方埋土及び炭化物層を検出した。しかし、池003側では据付穴は認められなかった。泉の中央部を南北方向で断ち割ったa-a'断面では炭化物層は厚く堆積しているが、泉の東寄りである据付穴の南北断割b-b'断面では南側のみ炭化物層が薄く堆積する。これを踏まえると、泉の中央部に向かって炭化物層がレンズ状に厚く堆積していたと推測される。なお、泉底面の炭化物層直下より石組の井戸017を検出した。

#### 井戸017（図13、図版5-2、6-1・2）

泉002の底面直下より検出した。径2.1～2.3mの円形掘方、内径1.3～1.4mの石組の円形井戸枠で、深さは0.58mを測る。石組は3段分のみで底面を検出した。石材は砂岩・泥岩・チャート・石灰質角礫岩（さざれ石）・花崗岩が用いられており、被熱しているものが多く、中には平坦面の加工があるものも認められたことから、転用材と考えられる。井戸枠内の埋土は灰黄褐色砂礫層で、現在も水は枯れておらず、埋土上面に湧水が浸透し、泉002の炭化物層まで水が及んでいた。湧水点は井戸東側の石組裏の灰黄色砂礫層からであり、標高45.65mの高さに位置する。石組の裏込土から遺物が出土しなかったため井戸の成立時期は不明であるものの、井戸枠の埋土より南北朝期から室町時代前半の土師器皿が見つまっていることから、泉002は造作する際に既存の井戸を埋め立て、その上に湧水施設を設けた可能性も考えられる。

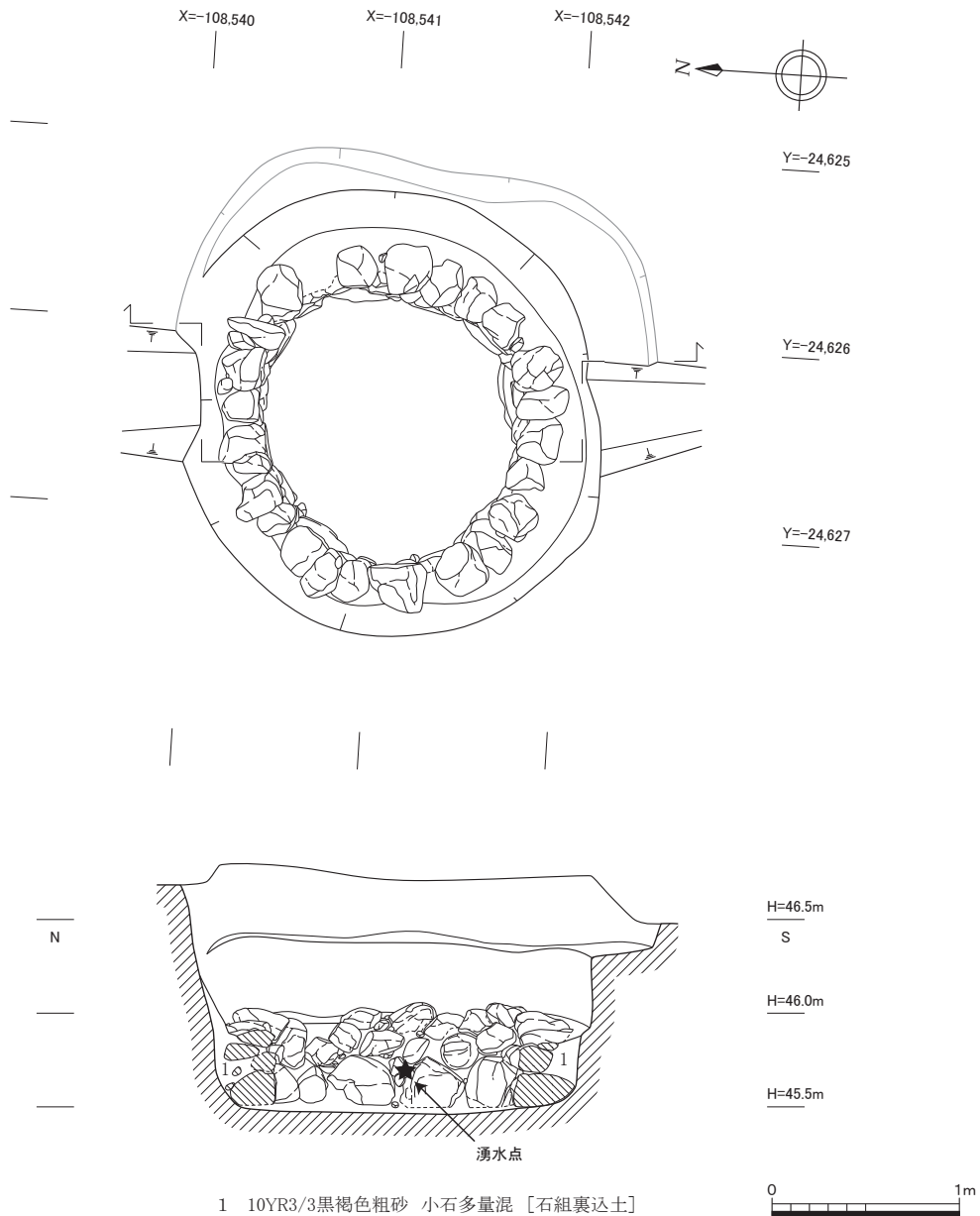


図13 井戸017平面・断面・立面図（1：40）

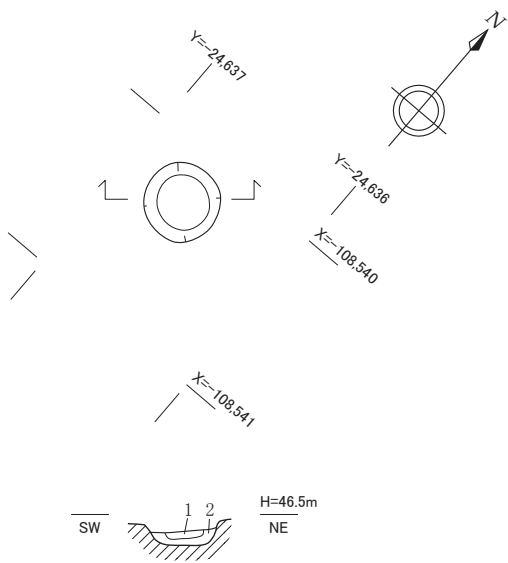
#### 柱穴009（図14）

調査区中央部西壁際で検出した。検出規模は、径約0.4m、深さ0.16m。柱当の埋土は土器細片混じりの黒褐色シルト層、掘方埋土は灰黄褐色細砂層を呈する。埋土中より時期を判別できる遺物は出土しなかったものの、埋土の様相が下記の土坑群と同じであることから、室町時代前半のものと考えられる。柱列として対応する他の柱穴は見つからなかったが、道祖大路東築地心推定位置より約0.4m西側に位置することから、築地堀の柱穴であった可能性も考えられる。

#### 土坑001

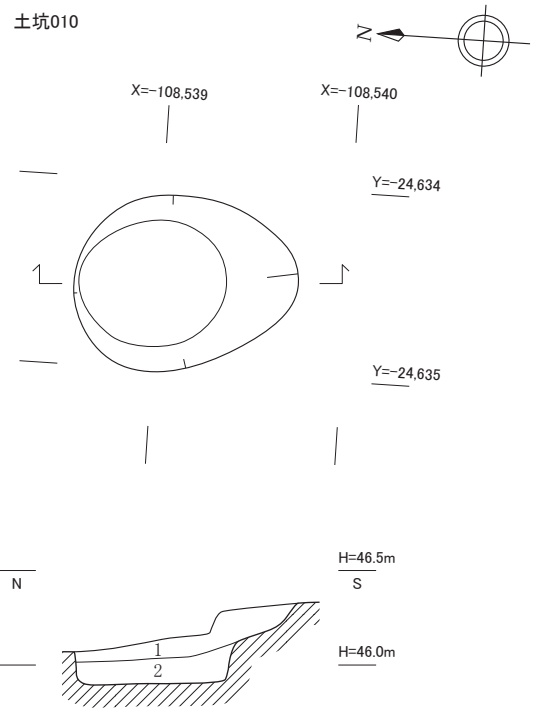
調査区中央部北寄りで検出した。検出規模は、東西約0.5m、南北約0.3m、深さ0.39mだが、試掘坑と南北断割によって遺構の西半及び南半が削平されている。埋土は地山ブロックと土器細片が多く混じる黒褐色シルトで、その内より室町時代前半の土師器皿が出土した。

柱穴009



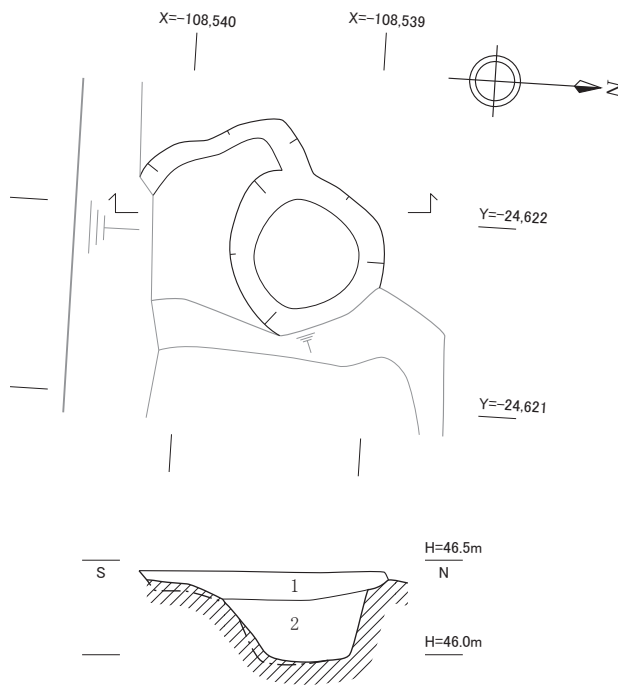
- 1 10YR3/2黒褐色シルト 土器細片混
- 2 10YR4/2灰黄褐色細砂 土器細片・小礫多量混

土坑010



- 1 10YR3/2黒褐色粘質土 土器細片・10YR5/6黄褐色シルトブロック・小礫多量混
- 2 10YR3/1黒褐色粘土 10YR5/6黄褐色シルトブロック・褐色粒混

土坑011



- 1 10YR3/2黒褐色シルト 土器細片・小石多量混
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 褐色粒・礫多量混



図14 柱穴009、土坑010・011平面・断面図 (1 : 40)

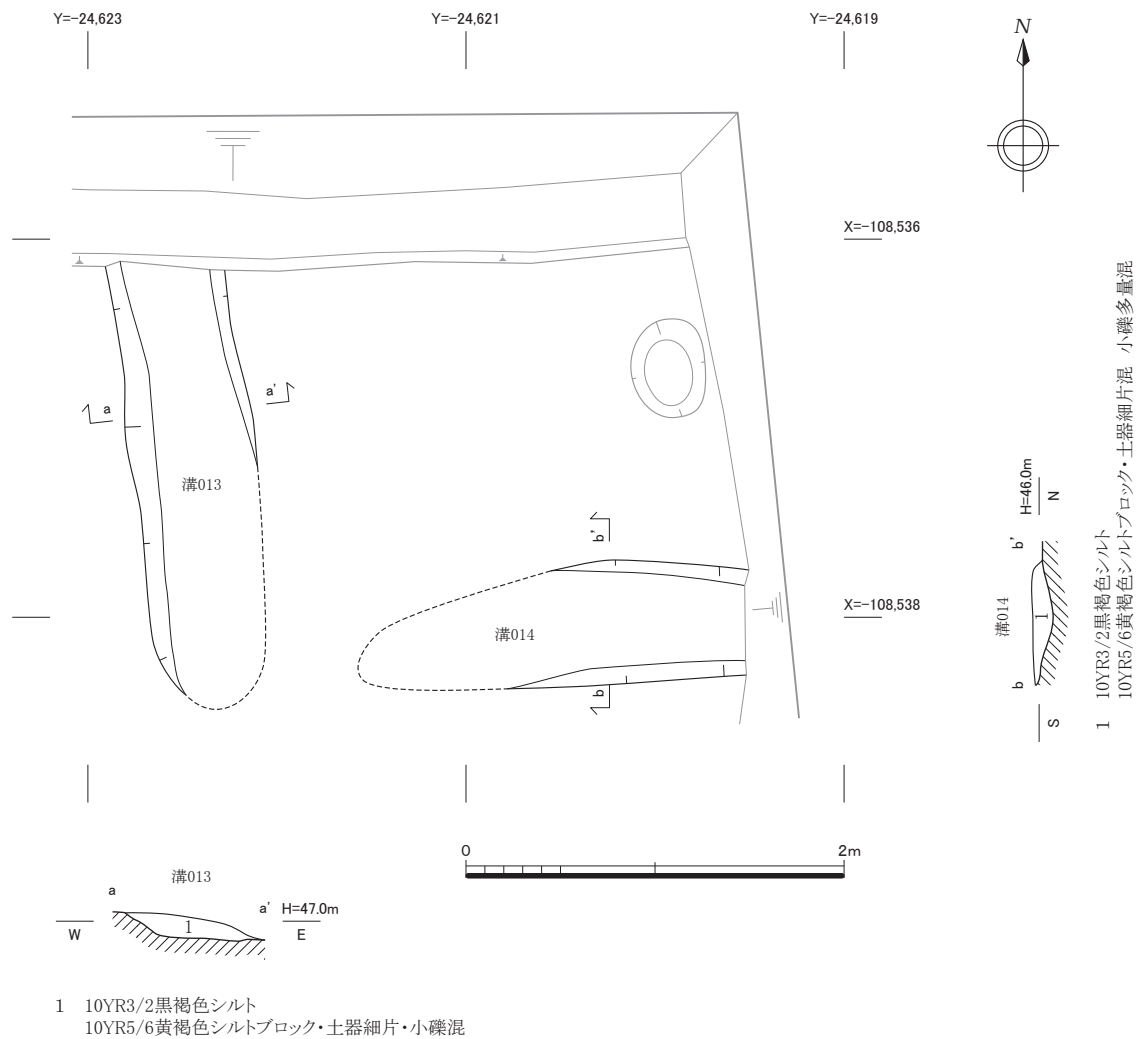


図15 溝013・014平面・断面図（1：40）

### 土坑010（図14）

調査区中央部西寄りの地点にて、御土居構築土と想定される黄褐色砂礫層の下より検出した。平面形が楕円状の土坑で、検出規模は南北約1.2m、東西約0.9m、深さ0.42mを測る。埋土は上層が地山ブロックと小礫混じりの黒褐色粘質土、下層が黒褐色粘土を呈する。埋土中より土師器・須恵器・桃の種が出土したが、土器が細片なため明確な時期を判別するまでに至らなかった。しかし、埋土の様相が他の土坑群と同じであることから、室町時代前半のものと考えられる。

### 土坑011（図14）

調査区北側東壁寄りで検出した。平面形が不定形な形状の土坑で、検出規模は南北約1.3m、東西約1.1m、深さ0.48m。遺構の西側が現代攪乱坑によって削平されており、南肩は調査区外南に延びる。埋土は土器細片・小石混じりの黒褐色シルト層である。鎌倉時代の土師器皿が多量に出土した他、南北朝期の土師器皿や室町時代前半の瓦質土器羽釜も埋土中に認められている。

### 溝013・014 (図15)

調査区北部東壁寄りで検出した。溝013が南北方向の溝、溝014が東西方向の溝である。検出時はL字状の溝になることを想定していたが、現代攪乱によって溝013の南端部及び溝014の西端部が削平されていたため、別々の遺構として取り扱っている。溝013が南北約2.3m、東西約0.7m、深さ0.16m。溝014が東西約1.3m、南北約0.7m、深さ0.11m。いずれも埋土は地山ブロック・小礫・土器細片が多く混じる黒褐色シルトである。埋土中より土師器・須恵器の細片の他、瓦質土器鍋が出土している。室町時代前半に属すると考えられる。

## 3 出土遺物

遺物はコンテナ5箱出土した。土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・石製品が出土している(表3)。泉及び池の埋立土より室町時代後半から御土居構築以前の時期に属する遺物、泉及び池の構築土・井戸・土坑群・溝からは南北朝期から室町時代前半の遺物が出土した。また、平安時代後期から鎌倉時代後半に属する遺物も多く混入していた。

表3 遺物概要表

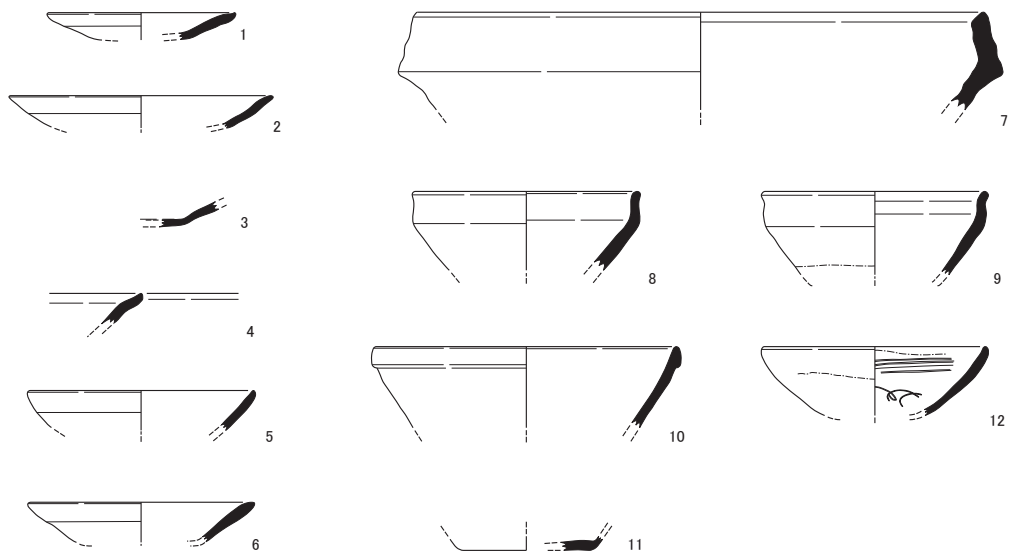
時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク 点数	C ランク 箱数
平安時代後期～ 鎌倉時代後半	土師器、白磁、瓦器、 焼締陶器		土師器1点、白磁2点、瓦器1点、 焼締陶器2点		
南北朝期～ 室町時代前半	土師器、瓦質土器		土師器10点、瓦質土器5点、石製 品1点		
室町時代後半～ 安土・桃山時代	土師器、焼締陶器、 施釉陶器、石製品		土師器4点、焼締陶器2点、施釉陶 器2点		
合計		6箱	30点(4箱)	0点	2箱

\*コンテナ箱数は、整理段階で1箱増加した。

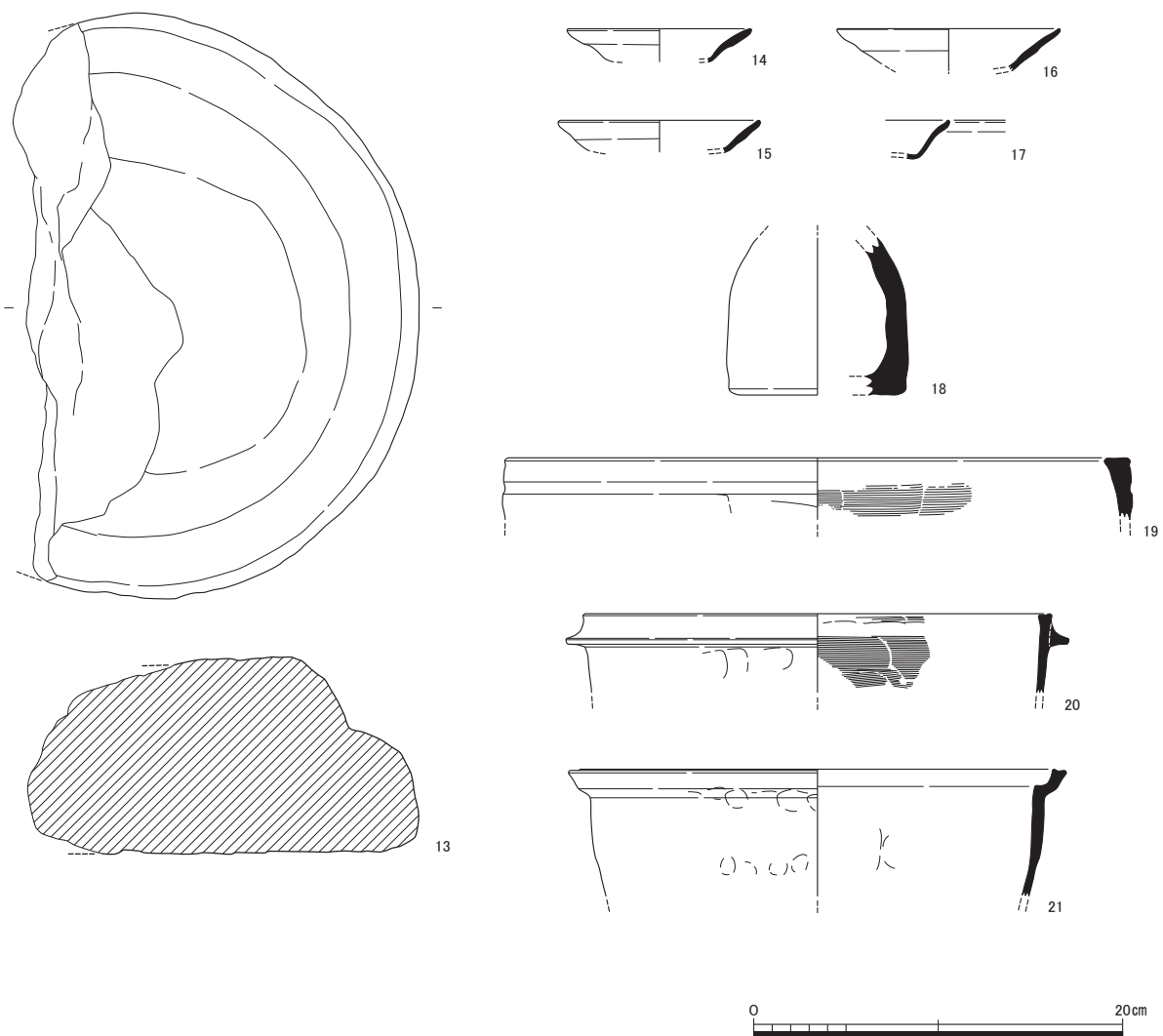
### 池003 (図16、図版7-1・2)

1～6は土師器の皿である。1は皿Sbで、口径9.9cm、器高1.4cmを測る。口縁を外反させ、端部をつまみ上げている。2・3は皿Sである。2は口径13.7cm、器高1.7cm。口縁を外反させ、端部内面に面がつくられている。3は細片のため径の復元が出来なかったが、底部内面の立ち上がり部に圏線になりかけの凹みが認められる。1～3は16世紀の所産とみられる。4は皿Shである。口縁を外反させ端部をつまみ上げている。15世紀後半に属すると考えられる。5は皿Sで、口径11.7cmを測る。体部がやや外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめられる。13世紀後半に比定される。6は皿Sbである。口径11.7cmで、端部内面に面がつくられている。15世紀前半の所産とみられる。7は備前の播鉢である。口径30.0cmを測る。厚みのある口縁部で、下端は突出せずに丸

池003



泉002

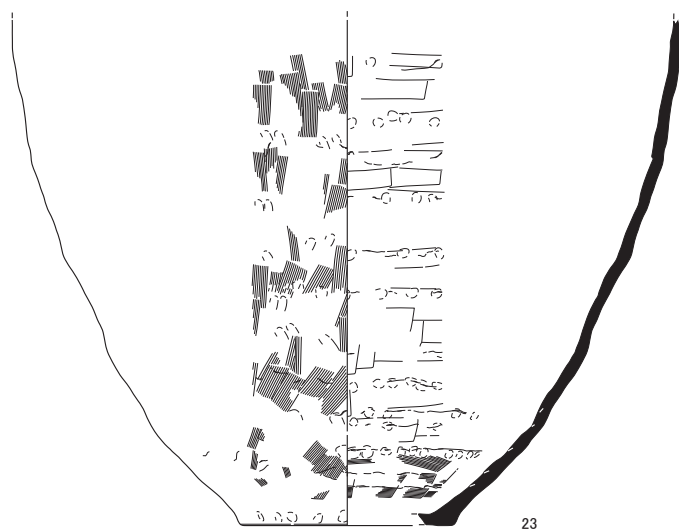
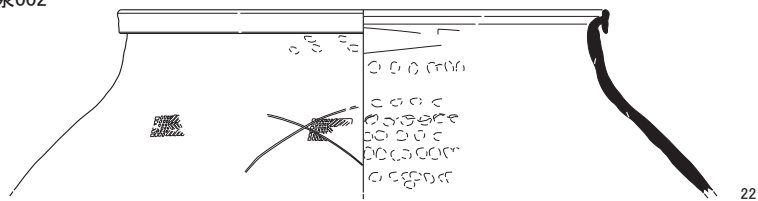


0 20cm

图16 出土遺物1 (1:4)



泉002



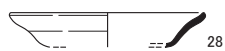
井戸017



土坑001



土坑011



溝014

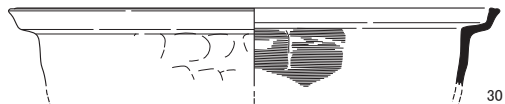


图17 出土遺物2 (1 : 4、1 : 8)

くおさめられ、端部内面に面がつくられている。16世紀後半に属する。8・9は天目茶碗である。8は口径11.7cmで、口縁部にくびれが見られ、端部は丸くおさめられる。16世紀中頃のものとみられる。9は口径11.6cmを測る。口縁部のくびれがさらに強くなり、端部が玉縁化している。16世紀末頃の所産と考えられる。10・11は白磁である。10は碗である。口径15.9cmで、口縁部が丸くおさめられた、いわゆる玉縁口縁碗である。福建省系のもので、11世紀後半から12世紀前葉に属する。11は皿の底部である。底径6.7cm。無文で、胎土は明オリーブ灰色と粗質である。口縁部が欠損しているが、口縁端部内外の釉を削る口禿の皿と想定される。13世紀中頃から14世紀初頭の所産と考えられる。12は瓦器碗である。口径11.8cmを測る。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられ、沈線は省略されている。口縁部内面にはヘラミガキ、見込みに連結輪状暗文が施される。楠葉Ⅳ-1期に属し、13世紀後半から末頃に比定される。13は花崗岩製礎石である。径31.8cm、厚さ10.9cm、柱を据える柱座の径は17.2cmを測る。1～3・7～11は御土居構築時の埋立土、4は池003の埋土、5・6は護岸構築土、13は池底より出土した。

#### 泉002 (図16・17、図版8-1～3)

14～17は土師器の皿である。14・15は皿Nである。14は口径9.9cm、器高1.8cmを測る。口縁立ち上がり部は強く屈曲し、口縁部は肥厚する。15は口径10.8cmで、口縁部がやや外反し、器厚は僅かに厚くなる。16は皿Sである。口径12.0cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁部が大きく開く。17は皿Shである。口縁を外反させ端部をつまみ上げている。これらは15世紀前半の所産と考えられる。18は備前の舟徳利の底部である。底径8.2cmを測る。16世紀後半から末頃の所産と考えられる。19～21は瓦質土器である。19・20は羽釜である。19は口径33.6cmの大型品で、口縁部がやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。鏝部分以下は欠損している。外面はナデ調整、内面はハケのちナデ調整が施されている。14世紀以降の所産と考えられる。20は口径24.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平たく仕上げられる。口縁部付近には短い鏝が貼り付けられる。体部外面にはハケ、内面はオサエのちナデ調整が施されている。外面に煤の付着が認められる。14世紀のものともみられる。21は鍋である。口径26.8cmを測り、体部は直線的に立ち上がり、口縁断面がL字状を呈する受け口を持つ。口縁端部は平たく仕上げられる。体部外面はオサエのちケズリ、内面はオサエのちナデ調整が施される。外面に煤の付着が認められる。14世紀に属すると考えられる。22・23は北側据付穴から出土した常滑の甕である。取上時は同一個体と想定したが、肩部の径が異なることから、別々の個体と考えた。南側の据付穴の中からは遺物が出土しなかったことから、埋め立てる際に破損した甕を両方とも北側に集中して投棄した可能性が考えられる。22は口縁部のみで、口径51.2cm、肩部最大径73.8cm。断面N字状を呈する口縁形態をしており、口縁部縁帯は2.5cmを測る。肩部には格子文と綾杉文が組み合わされた押印文が施され、その上に大きく×印の線刻がヘラ書きされている。肩部外面は縦方向のヘラケズリ、肩部内面はオサエのちヨコナデで仕上げられる。23は胴部及び底部で、底径17.4cm、胴部最大径70.8cm、残存器高53.5cm。底部は打ち欠きの痕が見受けられる。体部外面はオサエの

ち縦方向のヘラケズリ、体部内面はオサエのちヨコナデで調整される。いずれも13世紀後半の所産と考えられる。18・20は泉002の埋立土、16・17・22・23は北側据付穴、14・15・19・21は泉002の掘方埋土及び炭化物層より出土している。

#### 井戸017（図17、図版9-1）

24～26は土師器の皿である。24は皿Nで、口径7.4cm、器高1.2cmと小型品である。25は皿Shである。体部は直線的で、口縁部で僅かに外反し、端部はつまみ上げている。26は口径10.9cm。体部と口縁部の境に段が認められ、口縁端部は面取りにより断面が三角形を呈する。胎土は橙色である。皿Nの派生品か。これらは井戸枠内より出土した。いずれも14世紀の所産と考えられる。

#### 土坑001（図17、図版9-2）

27は土師器の皿Sである。細片のため口径の復元が出来なかったが、体部は直線的で、口縁部が開くように外反し、端部はつまみ上げられる。15世紀前半に比定される。

#### 土坑011（図17、図版9-2）

28は土師器の皿Nである。口径10.2cm、器高1.8cmを測る。口縁立ち上がり部は屈曲し、口縁部はやや肥厚する。端部はつまみ上げられる。14世紀の所産と考えられる。29は瓦質土器の羽釜の鏝部である。焼成が甘く、大型品であることから、15世紀以降の所産と考えられる。

#### 溝014（図17、図版9-2）

30は瓦質土器の鍋である。口径25.8cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁断面がL字状を呈する受け口を持つ。口縁端部は平たく仕上げられる。体部外面にはオサエのちナデ、内面にはハケのちナデ調整が施される。外面に煤の付着が認められる。14世紀の所産と考えられる。

## 第Ⅳ章 まとめ

本調査では、南北朝期から御土居構築以前の泉と池、井戸、御土居土塁などを検出した。以下、これまでの記述と重複するところもあるが、これらの調査成果をまとめ、周辺の調査成果も併せながら歴史的環境の評価と考察を述べてゆきたい。なお、本文中で述べる調査地を示す調査番号は図5・表1に対応する。

### 1 御土居について（図20）

当調査地で検出された御土居の土塁構築土は後世の削平により調査区中央部西寄りに位置する土坑010の直上で基底部分が僅かに残存しているのみであった。この層は中世瓦片を含む黄褐色砂礫層で、検出面の標高は46.55m、底面の標高は46.2mを測る。

調査地の南側で実施された円町公園内の試掘調査（19）<sup>(1)</sup>では、3箇所を試掘トレンチを設けて調査が行われている。当地より約8.7m南に位置する3区では、標高46.0mの高さで土塁構築土が確認された。底面の標高は45.4mとなる。3区より約3m南に位置する1区では、標高45.6mの高さで土塁構築土が検出され、底面の標高は45.0mを測る。このことから、土塁の底面は3～5m毎に0.5mずつ高くなりながら北から南に緩やかに傾斜していると推測される。そのため、当地の土塁基底部分は地表面より0.7m下にて底面が検出されることが想定され、今回検出された土塁構築土の底面はその値と合致する。

当地における御土居の存続時期を示す史料としては、明治三十五（1902）年『實地測量京都市全圖』では土塁の存在が確認されるが（図18）、大正四（1915）年『京都近傍図』では見られず、新たに佐井通が敷設されている（図19）。また、大正十一（1922）年『都市計画基本図』では、当地の北側に京都市立第二商業学校の記載が認められる。京都市立第二商業学校は明治四十三（1910）年に西陣にて開校したが、大正九（1920）年に現在の北野中学校校地へ移転した。『京二商史 同



図18 明治三十五（1902）年『實地測量京都市全圖』（『慶長昭和京都地図集成：1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』より転載・一部加工）



図19 大正四（1915）年『京都近傍図』（『慶長昭和京都地図集成：1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』より転載・一部加工）

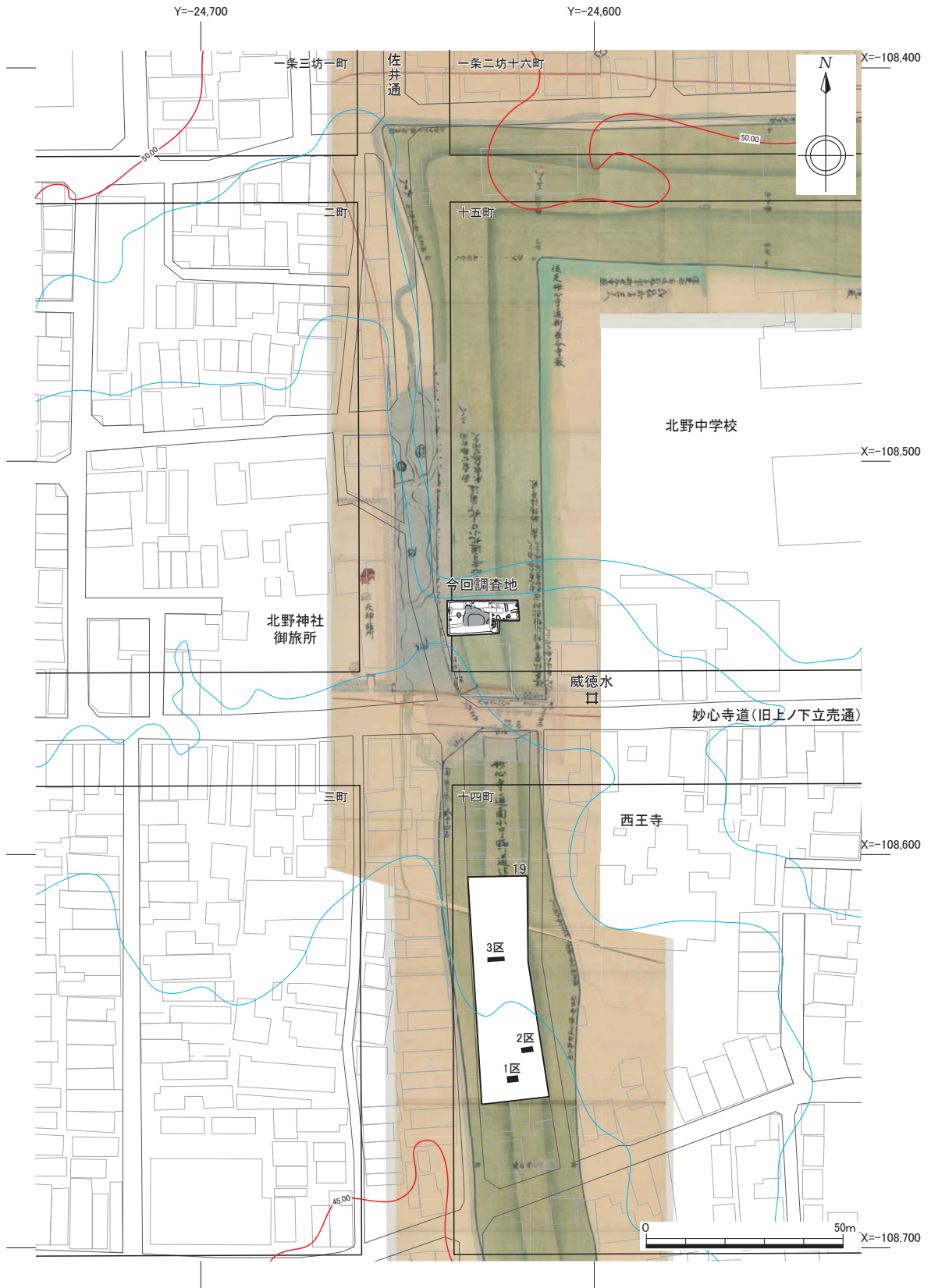


図20 元禄十五(1702)年『京都惣曲輪御土居絵図』(京都大学総合博物館所蔵)と今回調査地(1:1,500)

窓会発足九十周年記念』<sup>(2)</sup>によると、第二商業学校の校地を造成する際に、校地の北側と西側にあった土塁を崩して3尺余り土地を嵩上げしグラウンドを整地したとある。現在においても北野中学校校地と調査地の比高差は大きく、北野中学校校地の標高は49.5m、当地の標高は47.0mと、約2.5mの高低差がある。これについて、明治二十五(1892)年仮製図では御土居の濠であった佐井通は水路になっていることを踏まえると、大正四(1915)年以前に行われた佐井通敷設の際の水路埋立てのために削り取られたものと想定される。

## 2 御土居構築以前の遺構について

今回の調査では、南北朝期から御土居構築以前に属する泉002と池003、井戸017などを検出した。泉002は検出面より0.5m上が御土居構築時の埋立てによって攪乱されていたが、泉の下部構造は残存しており、その構築方法の復元をすることが出来た。湧水施設は特殊な構造をしており、井戸017を浸透性の高い砂礫層で埋め立て、その直上に底部を打ち欠いた常滑産の大甕を据え付けていた。大甕は据え付けの際に穴が掘られており、その穴の底面には炭化物層が観察された。井戸017からの湧き出る水に不純物や濁りの成分が混入するのを防ぎ、底部の炭化物層によって濾過された湧水を甕内に溜めるために用いられた浄水装置と考えられる。大甕は検出時にいずれも破壊されており、北側の据付穴に2個体分の破片が集中して投棄されていた。常滑甕は口縁部と体部のみ出土したため器高は不明であるが、両者の残存器高を合わせると、全長は70cm前後であったとみられる。この場合、据付穴の径と底部立ち上がり部の径を考慮した上で復元すると、甕の口縁部は泉の掘方上面とほぼ同じ高さに位置する(図21)。池003の推定水面は標高46.15m前後を測ることから、少なくとも地下水位がこの高さまで到達していたと考えられ、常滑甕の頸部付近までは甕内に水位が満たされていたと推測される。

京都市内で検出された構造物を伴う泉の事例は複数見つかっているが、このような湧水施設を設けた類似例は少ない(表5)。平安京右京六条一坊七町跡の試掘調査<sup>(3)</sup>では平安時代前期の泉が3基検出している。うち1基が地表面に礫が充填されており、水の湧出口となる箇所扁平な河原石が環状に配置されていた。環状に配置していることから、河原石上面に水を留める施設が伴っていた可能性がある。平安京右京三条二坊十六町跡の発掘調査<sup>(4)</sup>では平安時代中期の「斎宮」と関わりのある邸宅に伴う庭園跡が確認されている。そこで検出された泉は方形の掘方に礫敷が施され、地中構造物として方形の木枠が埋設されていた。この泉は景石・州浜を伴う池が導水路によって連結されている。平安京左京八条三坊五町跡の発掘調査<sup>(5)</sup>では平安時代末期から鎌倉時代後期の平頼盛の邸宅跡(八条室町亭)に伴う庭園跡の泉を検出している。この泉は州浜を備えた池内に位置しており、楕円形の掘方に礫敷を施し、その中心には泉の湧出口として常滑産大甕の口縁を見せるという趣向がとられていた。地中構造物としては方形の木枠を設けている。湧水口に甕を用いる点では本調査で検出した泉と共通しているが、八条室町亭の泉は地表面を礫敷で化粧するなど鑑賞を目的とした意向であり、浄水を目的とした今回の泉とはやや性格を異にすると考えられる。山科本願寺跡の発掘調査<sup>(6)</sup>では室町時代後半の泉が検出されている。泉は楕円形の掘方で拳大の

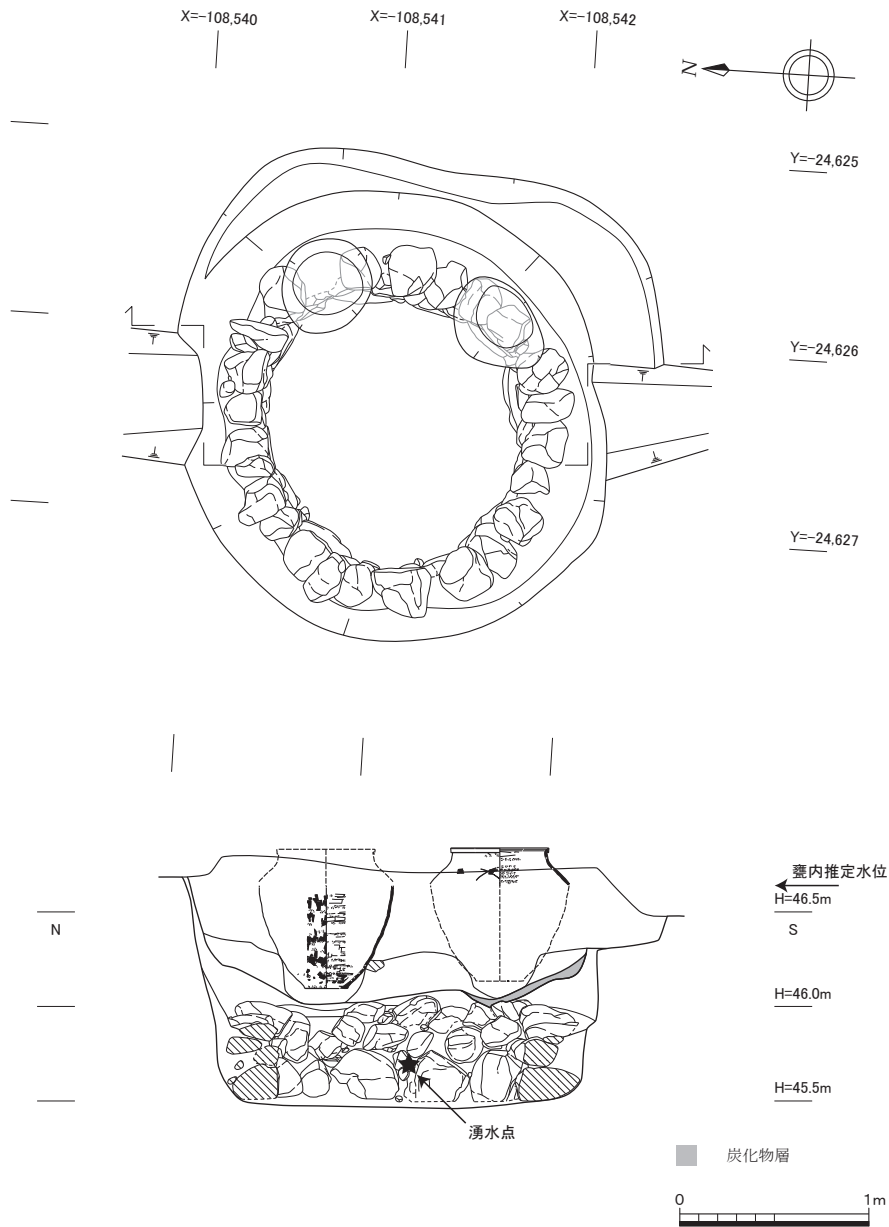


図21 泉002復元平面・立面図（1：40）

石敷を施し、景石が据えられていた。地中構造物は設けられておらず、素掘りの井戸である。京都市外の近郊地域では、大阪府島本町の尾山遺跡・御所池瓦窯跡の発掘調査<sup>(7)</sup>にて鎌倉時代後期から室町時代の泉が見つかっている。不整な円形の掘方に礫敷を施し、泉の北東部には導水路となる素掘りの溝が設けられ、池と溝の境には景石が据えられていた。泉の中央には地中構造物として石組の掘り込みを伴っている。また、井戸枠として大甕を用いた事例は東寺（教王護国寺）旧境内での発掘調査<sup>(8)</sup>にて認められている。当該調査では底を打ち欠いた備前焼の大甕を用いた井戸が2基見つかり、いずれも室町時代に属する。うち1基は下部構造として底部中央に曲物或いは小型の桶を据えた痕跡が確認された。京都府外ではあるが、井戸底に浄水装置として木炭を敷く事例（木炭敷）は、平城京右京二条三坊三坪跡<sup>(9)</sup>や奈良県橿原神宮外苑遺跡<sup>(10)</sup>で見つかっている。平城京右京二条三坊三坪跡の事例は雑木の枝幹などの細木を炭窯で炭化させたものが用いられて

表4 京都市近郊の構造物を伴う泉一覧表

調査地点	所属時期	掘方	上段構造物	下段構造物	備考	註
平安京右京六条一坊七町跡	平安時代前期	-	礫敷+河原石	-	湧水口に河原石を環状に並べて配置	3
平安京右京三条二坊十六町跡(「齋宮」跡)	平安時代中期	方形状	礫敷	木枠	州浜・景石を伴う池、導水路	4
平安京左京八条三坊五町跡(八条室町亭)	平安時代末期～鎌倉時代後期	楕円形状	礫敷+常滑甕口縁部	曲物+木枠	州浜を伴う池	5
尾山遺跡・御所池瓦窯跡	鎌倉時代後期～室町時代	円形状	礫敷+景石	石組枠	導水路を伴う	7
平安京右京一条二坊十五町跡	室町時代前半～安土・桃山時代	隅丸方形状	常滑甕	炭化物層+石組枠	州浜・景石を伴わない池	本調査
東寺(教王護国寺)旧境内	室町時代	円形状	備前甕	曲物?桶?	井戸状遺構	8
山科本願寺跡	室町時代後半	楕円形状	礫敷+景石	素掘り	導水路を伴う	6

おり、本調査で見つかった炭化物層においても、ネジキ・マツ属・コナラ属などの雑木の小枝を炭化させたものが利用されていた(附章参照)。ただし、池003の埋立土からはネジキ属の花粉が検出されていないため、当地より離れた場所で採取された細木が用いられているものと考えられる。

泉002より下で検出した井戸017は、深さ約0.6mと非常に浅い井戸で、湧水点は石組最上段より0.35m下に位置する。井戸の底が浅い場合、水の中に含まれる濁りの成分や不純物を沈殿させられず、水質が悪化するおそれがある。このことから、浅い井戸でも清水を得るために、泉002として改築する段階において浄水装置を設けたものと考えられる。また、井戸017の石組は、砂岩・泥岩・チャート・石灰質角礫岩(さざれ石)・花崗岩と多種の石材によって構築されており、これらの岩石は赤褐色・緑灰色・黒色・灰白色・黄褐色を呈する。これについて、陰陽五行説に則ったものである可能性が想定され、井戸の水が枯れないように水に住む神に祈念するための祭祀的な意匠であったものと考えられる。

泉002と北東側で接続する池003は北半部のみ検出された。南半部は調査区外南に広がるものと見られる。州浜や景石などの苑池の特徴が認められないものの、緑灰色～黄灰色砂礫層で構築された汀の護岸が確認され、護岸構築土を除去した池底面では細礫混じりの黒褐色シルトが貼り付けられているのが検出された。最大深が約1mと深いものの、腐植土が有機質泥層化した池埋土は標高46.15mの段階で検出したことから、放棄された段階での池の水位はこの程度であったと推測される。池埋土の直上には枝葉・竹材・丸木などが敷き詰められていたが、周囲に生育していた樹木が伐採されたもので、埋立ての際に投棄されたものと想定される。その上に御土居構築時に人為的に埋め立てられた土が堆積しており、密度の高い灰白色シルトのブロックを単位毎に充填し、その間隙にオリブ黒色粘土を流し込んでいた。これは御土居の盛土構築において見受けられる工法で、核となる小山を先行してつくり、空間を充填する構築方法と同じである<sup>(1)</sup>。池埋土直上にて検出された自然木・植物遺体も、盛土の圧密沈下を防止する目的から地盤の補強材として簡易的な敷葉工法を用いられたものと考えられる。池埋土直上にて検出された自然木及び池埋土に包含されていた種実・花粉を対象に自然科学分析を行った結果から、当時の調査地における植生を復元すると、アカウキクサ属・ガマ属・スゲ属といった水生・湿地性植物が池内に繁茂し、その周囲に



はアカマツやアカガシ、ムクノキなどが生い茂る二次林的な様相を示すが、当地における草本類の花粉の検出が相対的に少ないことから、鬱蒼とした林のような景観でなく比較的開けた場所であったことが推測される。また、庭木として生育されるエゴノキや、神社の生垣として植栽されるサカキ・ヒサカキ属の植物遺体及び花粉が認められること、栽培地近辺でしか産出されないソバ属の花粉が検出されていることが特徴的である。

今回検出された泉002及び池003の性格について、池003に景石や州浜を伴わないことから、貴族の邸宅・寺院に付随する「庭園」的な性格とは異なり、神社に付随する神泉から流れてきた霊水を集めるための池に類似していると考えられる。御土居構築以前の遺構の帰属時期について、井戸017の埋没時期及び泉002と池003の構築時期が南北朝期から室町時代前半となる。当地で見つかった土坑・溝・柱穴に関しても、埋土からの出土遺物が泉002の構築時期と同じであることから、泉及び池がつくられる際に当地周辺が整地された可能性がある。

これらの遺構について、存続時期が南北朝期から御土居構築以前に属することから、酒麴業を営み、北野天満宮に神役を納めていた商工業者「西京神人」の居住区である「四保」との関連性が想起される。以下、四保に関する史料と照合しながら、今回検出した遺構の歴史的な位置づけに関する検討を行う。

### 3 今回検出した遺構の歴史的環境について

四保は西京神人が住んでいた7つの居住区の総称である七保のうち真中の四番目の保を指し、「中保」とも呼称されている。「中保」は弘安六（1283）年の「北野宮寺公文得分注文」（『北野社家日記』第七巻）が初見であり、明治四十二（1909）年に成立した『北野誌』によると、北野天満宮創立の際に右京一条から二条までの間に七ヶ所の御供所が設けられ、その御供所に対し、西京神人の居住区の単位である七つの「保」が充てられたと説明されている。

御供所とは西京神人が北野社に貢納する神饌を備えるための場とされており、北野社に属する神宮寺として創建され<sup>(12)</sup>、元禄期に寺院名が付与された<sup>(13)</sup>。四保の御供所は「新長谷寺」と呼称されている。新長谷寺には菅原道真作と伝えられる枕箱観世音が安置されており、捨衣堂・麗衣堂と

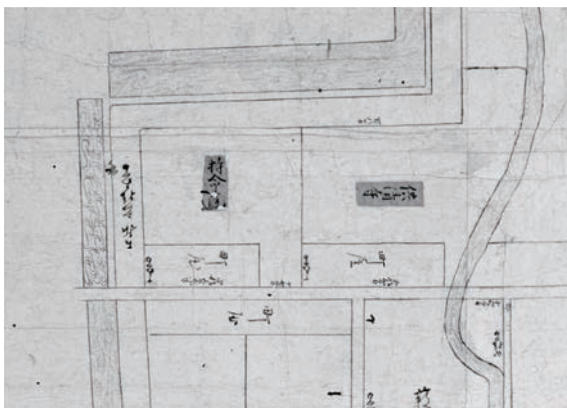


図22 寛永十九（1642）年『寛永後萬治前洛中絵図』（京都大学附属図書館所蔵）



図23 天保二（1831）年『改正京町繪圖細見大成』（立正大学図書館田中啓爾文庫所蔵）

も呼ばれていた<sup>(14)</sup>。元文五（1740）年に廃社し、現在は御供所の内にあった井戸跡とされる威徳水が残るのみである。ただし、文明十五（1483）年九月八日条『実隆公記』にて「則詣西京新長谷観□」と、三条西実隆が新長谷寺に参詣したという記述が認められることから、室町時代中頃には新長谷寺が成立していた。「観□」は観音を示しており、新長谷寺が観音堂を擁していたことが窺える。当地から妙心寺通を挟んで南東側に所在する西王寺は、寛文元（1661）年に臨済宗永源寺派として開山する以前、北野神宮寺が存在していた<sup>(15)</sup>。この寺の山号である更衣山も、新長谷寺の別称が「一名更衣寺」であったことに因むとされている<sup>(16)</sup>。

新長谷寺の境内の範囲を推測する史料として、寛永十九（1642）年に作成された『寛永後萬治前洛中絵図』（図22）が挙げられる。一条二坊十五町の範囲は「持命院」と記載されており、東側の十町に隣接するのは「供清寺」であるが、弘誓寺を指しているものと考えられる。天保二（1831）年の『改正京町繪圖細見大成』（図23）では、『寛永後萬治前洛中絵図』において「持命院」となっていた範囲の西半が「新長谷寺」と表記されており、東半が「ジユ命院」とされている。「ジユ命院」は「寿命院」を示していると考えられ、『寛永後萬治前洛中絵図』で見られる「持命院」はこの当て字と考えられる。貞享三（1686）年に作成された『雍州府誌』によると、寿命院は西京の紙屋川の東にある元律院と東山の泉涌寺に属し、近世になってこの院は泉涌寺の中に移設されたと説明されており<sup>(17)</sup>、泉涌寺蔵『寺改帳』及び『明細帳』においても、応長元（1311）年に建立され、慶長五（1600）年に西京中保町から泉涌寺内に移されたと記述されている。『雍州府誌』で示されている「元律院」とは鎌倉時代後期から南北朝期にかけて活躍した泉涌寺僧である無人如導が律宗泉涌寺流の寺院の本山として建立した長福寺を指しているものと推測される。足利義教が永享元（1429）年に御判した、如導によって中興・造営した35ヶ所の寺院の本寺を長福寺とすることが明記された『目録状』第二五二条の中にも寿命院が列記されており、長福寺の直末寺である永円寺の末寺として成立していたことが窺える<sup>(18)</sup>。また、寿命院は東向観音寺とも縁の深い寺院であることが、東向観音寺が所蔵する『往生要集鈔』から読み取ることができる。東向観音寺は延暦二十五（806）年に桓武天皇の勅願によって「朝日寺」として開山し、応和元（941）年に筑紫観世音寺より十一面観世音菩薩を請来した。寿命院を建立した同年の応長元（1311）年、如導が中興して律宗泉涌寺流の寺院となり、このときに「観音寺」と寺号を改めた<sup>(19)</sup>。本尊の十一面観世音菩薩は北野天満宮の本地仏とされていることから「北野神宮寺」とも認識されている。当該史料は浄土宗鎮西義の良忠によって撰出された『往生要集』の注釈書で、三冊分の写本である。奥書から如導が書き写し、正和三（1314）年九月から十月にかけて校合・加点了ことが読み取れる<sup>(20)</sup>。この表紙裏及び巻末に「寿命院」との蔵書印があることから、東向観音寺と緊密な関係にあったことが窺われる。

これらをふまえると、寿命院は鎌倉時代後半に律宗泉涌寺流の寺院として東向観音寺とともに建立され、東向観音寺とゆかりのある寺院として成立していたことが推測される。この時期は「中保」が初出された弘安六（1283）年の「北野宮寺公文得分注文」の成立時期とも近い。また、東向観音寺と同じく北野天満宮の神宮寺として認識されていた可能性があることから、四保の御供所で

ある「新長谷寺」は寿命院の別称であったと考えられる。『寛永後萬治前洛中絵図』では御土居として表記されている調査地も、御土居構築以前は寿命院の境内であったことが予測される。今回検出された泉002及び池003は寿命院内の苑池遺構である可能性が高い。当地においてサカキ・ヒサカキが繁茂する神祕的要素を持つ植生が認められることから、寿命院の神宮寺としての性格を反映しているものと想定される。本調査では鎌倉時代に属する遺構は認められなかったものの、当該期の土師器皿・瓦器椀・白磁椀などの遺物が一定量出土していることから、鎌倉期から当地が利用されていたことが窺える。寿命院は慶長五（1600）年に泉涌寺内へと遷るが、枕箱観世音を祀る観音堂が残され、それが「新長谷寺」として認識されていたのであろう。元禄八（1695）年に作成された「新長谷寺観音堂引直し願」<sup>(21)</sup>によると、当時の境内は南北51間（約92.7m）、東西16間（約29.0m）で、南側に出入口が2箇所設けられており、東側は御土居に隣っていた。境内の南西隅には梁桁1間半の観音堂が所在しており、観音堂の北東側、境内中央南寄りには桁行8間、梁行4間の御供所、その奥には梁桁1間半～3間の屋根付き建物が3棟並んでいた（図24）。

現在も当地東隣に残る威徳水も寿命院の境内に含まれていたと考えられる。「威徳」とは不動明王を中心とする五大明王の一員である大威徳明王を指し、密宗僧がその明王の力を借りようと修法するおりに、闍伽水をこの井戸から汲んだことに由来するとされる。また、空海の掘った井戸だとも伝えられており<sup>(22)</sup>、椿の大木のふもとから水が湧き小さな池へと注いでいたことから「椿水」とも呼ばれていた<sup>(23)</sup>。今回検出した泉及び井戸の湧水帯となった灰黄褐色砂礫層の小渓谷状の堆積は、X=-108,537～-108,542の間を東西方向に走り、Y=-24,625の地点で南側にカーブする。このまま南東方向に湧水帯が走る場合、威徳水の方向に向かうことが予測される。よって、当地で検出された泉の湧水は威徳水と地下水脈が同一であり、威徳水の前身として同様に霊水と認識されて

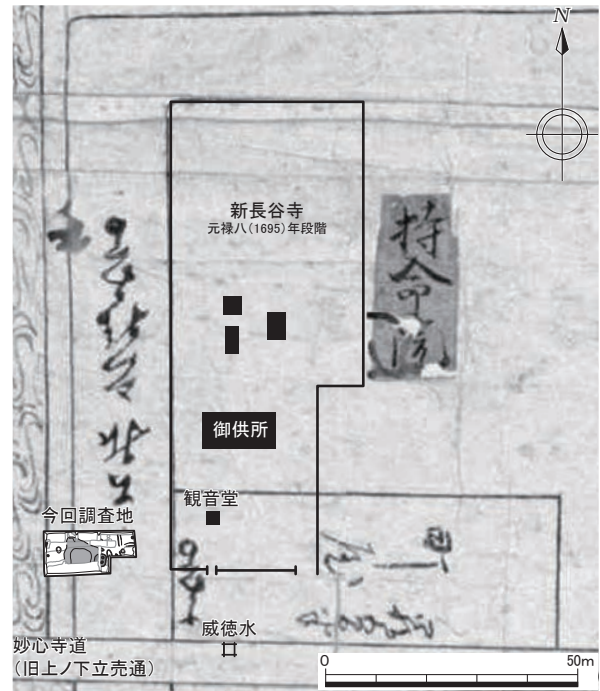


図24 『寛永後萬治前洛中絵図』（京都大学附属図書館所蔵）と新長谷寺境内模式図（1：1,500）



図25 『石山寺縁起』第4巻（国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

いたものと推測される。今回の調査では泉の周辺に建物跡は検出されなかったが、泉には図25のように水屋が伴っていた可能性も想定される。また、2体の甕を用いた湧水施設は「半井」を含めて検討する必要がある<sup>(24)</sup>。半井とは井戸の中に仕切り板などを設けて半分に分けた井戸を指しており、正徳二（1712）年に成立した『倭漢三才図会』七二巻において、医者である和氣氏の邸宅内の井戸に関する記述で見受けられる。そこでは一つの井戸を区切って水の用途を異とするために用いられたとされ、一方を製薬用、もう一方を雑用の水としていた。湧水には清濁の区別が生じないものの、水の聖俗を分かちつための便宜的形式として採用されたものと想定される。これを踏まえると、神宮寺に務める僧侶は、神水は神井から、關伽水は關伽井から調達しなければならず、それらを一つの泉から得るために2体の甕を半井として活用した可能性がある。

以上、今回の調査では、御土居の土塁構築土そのものの残存状況は悪かったが、西京七保の御供所と推定される寺院に関わる苑池遺構が検出された。特に、威徳水の前身である特殊な遺構が検出され、密教僧の修法に用いられた泉であることから、御土居の袖の性格や中世における西ノ京の土地利用の在り方を解明する資料を得ることが出来た。今後の調査によって、更なる歴史的解明の発展が期待される。

#### 註

- (1) 赤松佳奈「IV-1 平安京右京一条二坊十四町跡、御土居跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
- (2) 京二商史編集委員会『京二商史 同窓会発足九十周年記念』大来会 2003年
- (3) 西森正晃「IV-2 平安京右京六条一坊七町跡 No.9・47」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局 2011年
- (4) 網 伸也・清藤玲子・鈴木廣司・辻 裕司『平安京右京三条二坊十五町・十六町 「齋宮」の邸宅跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告21 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- (5) 辻 裕司・木下保明・長戸満男・大立目一・布川豊治『平安京左京八条三坊四・五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- (6) 柏田有香「VI 山科本願寺跡（3）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006
- (7) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡 北部大阪都市計画事業J R島本駅西土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書 第43集・公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第316集 2022年
- (8) 吉崎 伸・高橋 潔『東寺（教王護国寺）旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- (9) 鐘方正樹・池田裕英・原田憲二郎「(6) 平城京右京二条三坊三坪の調査 第273-2・283次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』奈良市教育委員会 1994年
- (10) 樋口清之『日本木炭史』講談社 1993年
- (11) 下京区朱雀堂ノ口町内の発掘調査（平田 泰ほか「右京七条一坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調

査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年)、右京区壬生淵田町内の詳細分布調査(鈴木久史「Ⅲ-2 平安京右京四條二坊十一町跡・壬生遺跡・御土居跡(13H408)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年)、北区柴野北花ノ坊町内の発掘調査(持田透・関広尚世『御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年)にて認められている。

- (12) 天保十四(1843)年「安楽寺修復由緒書」本郷家文書三九二号
- (13) 「西京神人御補任之事」元禄二(1689)年『北野天満宮史料 目代日記』
- (14) 川合銀之助「北野天満宮と七保御供所攷」『史迹と美術』第四一・四二号 1934年
- (15) 「在同處元北野神宮寺也近世為禪刹屬近江山上永源寺」貞享三(1686)年『雍州府誌』卷五寺院門下
- (16) 「臨濟宗永源寺派更衣山西王禪寺 平成10年9月 誌」
- (17) 「在西京紙屋川東元律院而屬東山泉涌寺與寺中新善光寺為通用近世遷斯院於院泉涌中而為一院」貞享三(1686)年『雍州府誌』卷五寺院門下
- (18) 「安楽光院 寿命院 此兩寺永円寺之末寺也」永享元(1429)年『目録状』第二五二条
- (19) 応永九(1402)年に成立した『無人和尚行業記』によると、如導は若年期に北野天満宮に千日詣を行い、満願の日に神託を受けたことを機に、浄土宗鎮西義の僧侶となっていることから、天神信仰が深いことが推測される。観音寺の再興も、如導の天神信仰の所産と想定される。
- (20) 「正和三年九月廿四子時校点畢／後見為一切衆生出離生死念仏十反／南無阿弥陀仏／小比丘如導」  
「正和三年十月六日子時校点畢後見為一切衆生出離生死念仏十反／南無阿弥陀仏々々々々々々小比丘如導」  
「正和三年九月廿四日卯時一交畢／後見為一切衆出離生死頓証菩提念仏十反／南無阿弥陀仏／小比丘如導」箱入で、蓋表に「無人宗師真蹟／往生要集鈔三卷 第一第二第三」、「寿命院」の蔵書印有。
- (21) 元禄八(1695)年六月「新長谷寺観音堂引直し願」本郷家文書一二八号
- (22) 井上頼寿『改訂 京都民俗志』平凡社 1968年
- (23) 今井松太郎「『御土居の袖』について」『京商論集』創刊号 1965年
- (24) 迂路佇驢子「半井という井戸一二分型式の井戸一」『大阪文化誌13』財団法人大阪文化財センター 1980年

#### 参考文献

- 大谷由香「五辻山長福寺と「県蓮上人門徒」について—浄土教団としての泉涌寺末寺の動向—」『東洋の慈悲と智慧：多田孝文名誉教授古稀記念論文集』多田孝文名誉教授古稀記念論文集刊行会 2013年
- 大塚紀弘「中世都市京都の律家」『寺院史研究』第十号 寺院史研究会 2006年
- 澁澤敬三『絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻 平凡社 1984年
- 高橋大樹「『西京七保』御供所の近世—御供所寺院とその維持・管理—」『洛中周辺地域の歴史的変容に関する総合的研究』佛教大学総合研究所別冊 佛教大学総合研究所 2013年
- 東向観音寺史料調査団「東向観音寺史料目録(一)」東京大学日本史学研究室紀要第9号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室 2005年
- 三枝暁子『日本中世の民衆世界—西京神人の千年』岩波書店 2022年

表5 遺物観察表

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	備考
1	土師器	皿	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	9.9	(1.4)	-	2.5Y8/1 灰白色	皿 Sb
2	土師器	皿	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	13.7	(1.7)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 S
3	土師器	皿	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	-	(1.3)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 S
4	土師器	皿	C2	池 003(5Y3/2 シルト)	-	(1.6)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 Sh
5	土師器	皿	D2	池 003(10GY5/1 砂礫)	11.9	(2.1)	-	10YR8/2 灰白色	皿 S
6	土師器	皿	D2	池 003(10GY5/1 砂礫)	11.7	(2.1)	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 Sb
7	焼締陶器	播鉢	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	30.0	(5.1)	-	5YR3/2 暗赤褐色	備前
8	施釉陶器	椀	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	11.7	(4.2)	-	(胎)10YR8/3 浅黄橙色 (釉)10YR2/2 黒褐色	天目茶椀
9	施釉陶器	椀	D2	池 003(10YR3/2 粘土)	11.6	(4.4)	-	(胎)10YR8/2 灰白色 (釉)7.5YR3/2 黒褐色	天目茶椀
10	白磁	椀	E2	池 003(10YR3/2 粘質土)南北断割	15.9	(4.3)	-	(胎)5Y8/1 灰白色 (釉)5Y7/1 灰白色	福建省系
11	白磁	皿	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	-	(7.5)	6.7	(胎)N9/ 白色 (釉)2.5GY7/1 明オリーブ灰色	福建省系
12	瓦器	椀	D2	池 003(5Y3/1 粘土)	11.8	(3.6)	-	2.5Y8/1 灰白～ N4/ 灰色	楠葉Ⅳ -1 期
13	石製品	礎石	D3	池 003 底面直上	長 31.8	幅 (22.0)	厚 10.9		花崗岩製
14	土師器	皿	E3	泉 002(10YR4/1 シルト)	9.9	(1.8)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
15	土師器	皿	E3	泉 002(炭化物層)	10.8	(1.7)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
16	土師器	皿	D3	泉 002 北側据付穴	12.0	(2.3)	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 S
17	土師器	皿	D3	泉 002 北側据付穴	-	(2.1)	-	10YR8/2 灰白色	皿 Sh
18	焼締陶器	德利	E3	泉 002 南側据付穴上面	-	(8.5)	8.2	2.5Y6/1 黄灰色	備前
19	瓦質土器	羽釜	E3	泉 002(炭化物層)	33.6	(3.4)	-	N4/ 灰	
20	瓦質土器	羽釜	E3	泉 002 南側据付穴上面	24.2	(4.3)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
21	瓦質土器	鍋	E3	泉 002(10YR4/1 シルト)	26.8	(7.9)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
22	焼締陶器	甕	E3	泉 002 北側据付穴	51.2	(19.1)	-	5YR5/3 にぶい赤褐色	常滑
23	焼締陶器	甕	E3	泉 002 北側据付穴	-	(53.5)	17.4	5YR5/3 にぶい赤褐色	常滑
24	土師器	皿	E3	井戸 017 枠内	7.4	1.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	皿 N
25	土師器	皿	E3	井戸 017 枠内	-	(1.6)	-	7.5YR8/2 灰白色	皿 Sh
26	土師器	皿	E3	井戸 017 枠内	10.9	(1.9)	-	5YR6/6 橙色	皿 N の派生品か
27	土師器	皿	E-1・2	土坑 001	-	(1.9)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 S
28	土師器	皿	F2	土坑 011	10.2	(1.8)	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	皿 N
29	瓦質土器	羽釜	F2	土坑 011	-	(2.2)	-	7.5YR8/3 浅黄橙	
30	瓦質土器	鍋	G2	溝 014	25.8	(4.3)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	

## 附章 平安京右京一条二坊十五町跡・ 御土居跡の自然科学分析

株式会社 古生態研究所

はじめに

今回の分析調査では、御土居構築以前、桃山期に埋め立てられた池003埋土を対象として、花粉分析、大型植物化石分析、樹種同定を実施し、当該期の周辺古植生に関する情報を得る。また、同時期に埋め立てられた、室町時代前半以降に構築された泉002の埋甕据付層中に挟在する、湧水を濾過するために用いられた可能性がある炭化物層の炭片について、樹種同定を実施し、用材の種類に関する情報を得る。

### 1. 試料

#### (1) 池003

試料は、池003の機能期～放置期に形成された有機質泥層（8層）上部から採取された堆積物試料1点と、8層上面から出土した木材5点である（図1）。

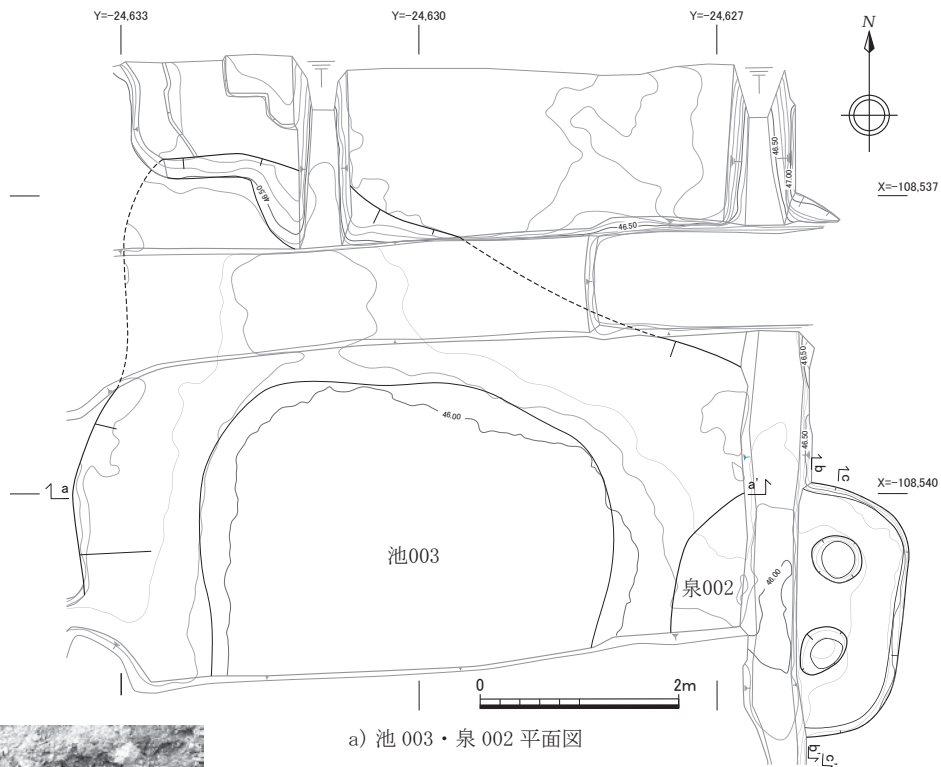
8層の有機質泥層は、池中央付近で厚さ20cm程度、上位を覆う埋立土などの圧密により、比較的固く締まっている。有機質泥層中には堆積期間中に池周囲から流入、崩落した種実や砂礫などが混じる。最下部には遺構掘削時に生じたとみられる砂礫ブロック土が散布する。また、底面には人為的に投入された礎石が1点出土している。

有機質泥層の上位には人工的な埋立土（1層～7層）が堆積する。この人工堆積物最下部には丸木やタケ材、大礫が認められ、その上位に砂質泥、泥、腐植質土壌などの由来の異なる堆積物を材料とするブロック土と、中礫・細礫、腐植質泥質砂などが混合された堆積物などで充填されている。ブロック土は、巨礫～中礫サイズまで多様で、垂角塊状～角塊状を主とする。

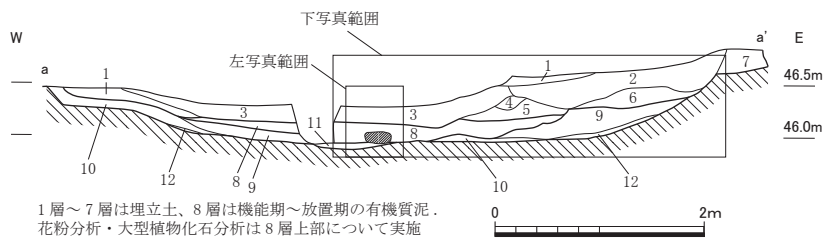
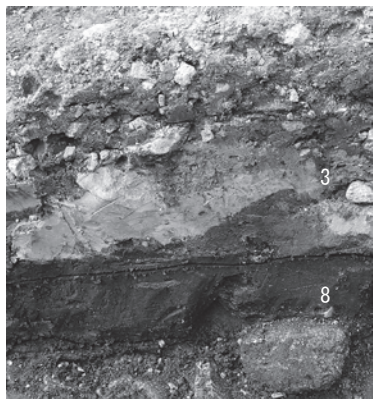
8層上部の堆積物試料について、花粉分析・大型植物化石分析、8層上面の木材について樹種同定を実施する。

#### (2) 泉002

試料は、埋甕が設置されている遺構構築土中に挟在する炭化物層（10層）から採取された炭片混じりの堆積物1点である（図1）。堆積物中には、大きさ1cm以下の角が丸くなっている炭化材片が密集する。炭化物層からは室町時代前半の遺物が出土しており、構築土上位の埋立土（1～5層）からは桃山期の遺物が出土している。炭化物層から抽出した炭片について樹種同定を実施する。



a) 池 003・泉 002 平面図

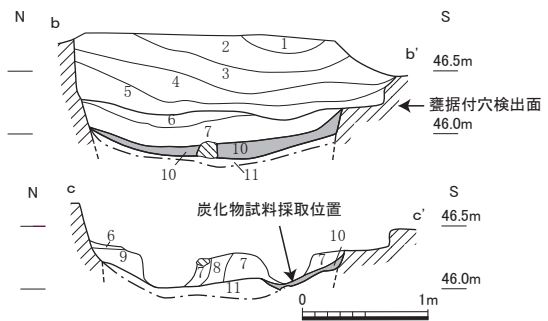


b) 池 003 東西断面図

← 池 003 東西断面写真 (写真範囲は断面図中の□範囲)



c) 池 003 埋土 8 層上面の木材の検出状況写真



d) 泉 002 埋土断面

1～5層は埋立土、6～7層は泉 002 構築土。  
樹種同定は 10 層中の炭片について実施。

図 1. 試料採取位置



## 2. 分析方法

### 2-1 花粉分析

試料(湿重量約10g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお、複数の種類(分類群)をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。また、木本・草本を含む分類群については草本花粉として扱っている。

### 2-2 大型植物化石分析

堆積物試料150ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出し、実体顕微鏡下で観察し、種類(分類群)同定を行う。

同定は、現生標本や藤下(1984)、石川(1994)、角野(1994)、谷城(2007)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)、勝山(2015)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表、産出分類群の写真を図版として示す。なお、種実以外の分析残渣は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で示す。分析後の種実遺体は、分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

### 2-3 樹種同定

生材は、剃刀を用いて木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の3断面について徒手切片を作製した。切片をガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。

炭化材は、自然乾燥させた後、3断面について割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定した。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強した。走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察した。

各試料で観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定した。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

### 3. 結果

#### 3-1 花粉分析

花粉分析結果を表1、花粉化石群集の層位分布を図2に示す。花粉化石の保存状態は、やや悪く、花粉外膜が壊れているもの・薄くなっているものが多かった。花粉化石群集の構成比は、木本花粉が36%、草本花粉が24%、シダ類孢子26%を示し、産出化石の11%は同定が不可能なほど保存状態の悪いものであった。

木本花粉では、湿地や乾燥地などの痩悪地でも生育する、二次林の代表的な樹種でもあるマツ属複維管束亜属が多産した。このほか、川沿いなどの水分条件の良好な場所によく生育する、落葉高木のエノキ属-ムクノキ属、エゴノキ属、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成種を含む常緑高木のアカガシ亜属、常緑低木から亜高木のヒサカキ属-サカキ属、河原や伐採跡地などの日当たりの良い場所に生える落葉高木のアカメガシワなどが特徴的に産出した。

草本花粉・シダ類孢子では、湿った場所にも乾いた場所にも生育可能な中生植物のイネ科と、水面を浮遊する小型のシダ植物であるアカウキクサ属が多産した。このほか、水生植物のガマ属、栽培種のソバ属、人里植物のオオバコ属、木本・草本を含む分類群であるバラ科、クワ科、マメ科などが産出した。

#### 3-2 大型植物化石分析

堆積物および調査時取上試料の同定結果を表2に示す。堆積物試料から産出した大型植物化石は、木本種実94個、草本種実45個、不明種実2個の合計139個に同定された。発掘調査時に取り上げられた種実は、木本種実16個に同定された。

木本は全て広葉樹で、常緑広葉樹のアカガシ亜属（アラカシ含む）、常緑小高木または低木のサカキ、ヒサカキ属、落葉高木のセンダン、タラノキ、落葉低木のフユイチゴ類、キイチゴ属、落葉籐本のブドウ属が確認された。

草本は、湿った場所にも乾いた場所にも生育可能な中生植物のイネ科（シバ類?）、スゲ属、ナデシコ科A、ナデシコ科B、キジムシロ類、栽培種のイネの粉、メロン類（雑草メロン型、マクワ・シロウリ型含む）の可能性のある破片が確認された。

#### 3-3 樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。池003出土木材は広葉樹3分類群（コナラ属アカガシ亜属、クリ、エゴノキ属）とマダケ属、泉002の炭化材は針葉樹1分類群（マツ属複維管束亜属）と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ節、ネジキ、タカノツメ、スイカズラ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、

表 1. 池 003 堆積物の花粉分析結果

種類(分類群)	学名(Taxon)	8層上部
木本花粉	Arboreal pollen	
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	44
マツ属(亜属不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	2
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	6
カバノキ属	<i>Betula</i>	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	4
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i>	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	18
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	18
クリ属	<i>Castanea</i>	2
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Ahananthe</i>	29
アカメガンショ属	<i>Mallotus</i>	14
モチノキ属	<i>Ilex</i>	4
ブドウ属	<i>Vitis</i>	4
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	1
ヒサカキ属-サカキ属	<i>Eurya-Cleyera</i>	16
ツバキ属	<i>Camellia</i>	1
ウコギ科	Araliaceae	5
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	5
クサギ属	Clerodendron	1
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	9
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	
ガマ属	<i>Typha</i>	1
イネ科	Gramineae	69
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4
クワ科	Moraceae	12
タデ属ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	1
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	7
アカザ科	Chenopodiaceae	1
ヒユ科	Amaranthaceae	2
アブラナ科	Cruciferae	8
バラ科	Rosaceae	11
マメ科	Leguminosae	2
セリ科	Umbelliferae	2
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	5
キク亜科	Carduoideae	1
タンポポ科	Cichorioideae	2
シダ類孢子	Pteridophyta	
アカウキクサ属	<i>Azolla</i>	70
単条型孢子	Monolete spore	65
三条型孢子	Trilete spore	5
不明花粉	unknown	
不明花粉	unknown	16
同定不能花粉	poorly preserved pollen	60
合計	Total	
木本花粉	Arboreal pollen	197
草本花粉	NonArborealpollen	129
シダ類孢子	Pteridophyta	140
不明花粉	unknown	76
合計	Total	542

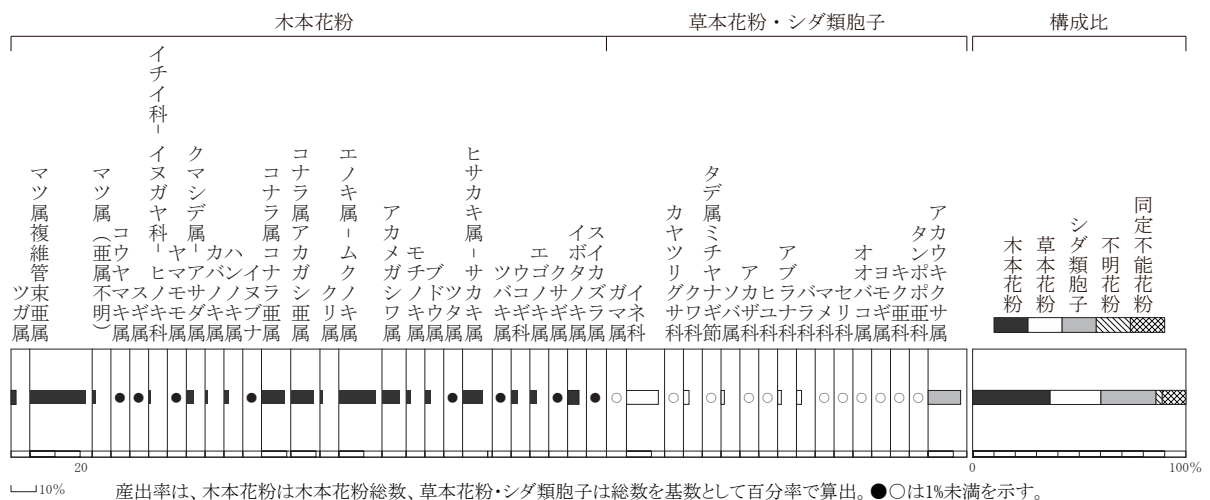


図 2. 池 003 堆積物の花粉化石群集

表2. 池 003 堆積物の大型植物化石分析結果

分類群	学名 (Taxon)	部位・状態	堆積物	発掘時取上げ'種実	備考
木本種実					
アラカシ	<i>Quercus glauca</i> Thunb.	果実	完形	-	10
			破片	-	6
アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	殻斗	破片	2	-
サカキ	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	種子	完形	1	-
ヒサカキ属	<i>Eurya</i>	種子	完形	2	-
フユイチゴ類	cf. <i>Rubus buergeri</i> Miq.	核	完形	4	-
			破片	2	-
キイチゴ属	<i>Rubus</i>	核	完形	78	-
			破片	1	-
センダン	<i>Melia azedarach</i> L.	核	完形	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	完形	1	-
タラノキ	<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seem.	核	完形	2	-
草本種実					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	籾(基部)	破片	6	-
		籾	破片	10	-
イネ科	Gramineae	果実	破片	1	-
スゲ属	<i>Carex</i>	果実	完形	1	-
ナデシコ科A	Caryophyllaceae A	種子	完形	1	-
ナデシコ科B	Caryophyllaceae B	種子	完形	1	-
キジムシロ類	cf. <i>Potentilla fragarioides</i> L. var. <i>major</i> Maxim.	核	完形	23	-
メロン類?	<i>Cucumis melo</i> ?	種子?	破片	2	-
不明種実	Unknown		完形	1	-
			破片	1	-
合計					
木本種実				94	16
草本種実				45	0
不明種実				2	0
種実合計(不明を除く)				139	16
木材				++	-
炭化材				++	-
葉片				++	-
蘚苔類の茎・葉				++	-
植物片				+	-
昆虫類				+	-
岩片・土粒類				+	-
分析量	容積(cc)			150	-
	湿重(g)			194.4	-

水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* subgen. sect. *Prinus* ブナ科

環孔材。小径材で、年輪の始め(早材部)に比較的大径の道管が3～4列配列した後、やや急激に径を減ずる。晩材部では小径の道管が多数集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め(早材部)に大型の道管が3～4列配列した後、やや急激に径を減じる。晩材部では小径の道管が点在する。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

表3. 樹種同定結果

遺構	状態	番号	形状	樹種(分類群)	学名(Taxon)
池003 8層上面	生木	試料1	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
		試料2	芯持材	エゴノキ属	<i>Styrax</i>
		試料3	芯持材	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
		試料4	根株	クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
		試料5	割竹状	マダケ属	Gramineae subfam. Bambusoideae
泉002 構築土 10層	炭化材	仮1	半割状(直径5mm)	ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i> (Wall.) Drude Subsp. <i>neziki</i> Hara
		仮2	半割状(直径5mm)	ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i> (Wall.) Drude Subsp. <i>neziki</i> Hara
		仮3	ミカン割状	ネジキ	<i>Lyonia ovalifolia</i> (Wall.) Drude Subsp. <i>neziki</i> Hara
		仮4	芯持材	マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>
		仮5	半割状(直径4mm)	タカノツメ	<i>Evodiopanax innovans</i> (Sieb. et Zucc.) Nakai
		仮6	破片	マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>
		仮7	芯持丸木(直径1mm)	スイカズラ属	<i>Lonicera</i>
		仮8	破片	マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>
		仮9	芯持丸木(直径3mm)	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. sect. <i>Prinus</i>
		仮10	破片	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. sect. <i>Prinus</i>

通常のクリの幹・枝とは晩材部の道管配列が大きく異なるが、その他の特徴からクリと判断した。試料とした木片の繊維が捻れている状況が観察できることから、根株に近い部位の可能性が有る。

・エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

散孔材。道管は単独または2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

・ネジキ *Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude Subsp. *neziki* Hara ツツジ科ネジキ属

散孔材。道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は階段穿孔板となる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・タカノツメ *Evodiopanax innovans* (Sieb. et Zucc.) Nakai ウコギ科タカノツメ属

環孔材。年輪の始め(早材部)にやや大型の道管が1列、接線方向に点在して配列した後、急激に径を減じる。晩材部では小径の道管が単独または2～4個が放射方向、斜方向等に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・スイカズラ属 *Lonicera* スイカズラ科

散孔材。小径の道管が単独または4～5個が複合して散在する。道管の穿孔板は単穿孔板および階段穿孔板、壁孔は交互状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高で単列の組織が主体となる。

・マダケ属 Gramineae subfam. Bambusoideae

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。タケ亜科を解剖学的に区別することは難しいが、節の稜が二重になる特徴からマダケ属に同定される。

## 4. 考察

### 4-1 池003の植物化石からみた古植生

今回の調査地は天神川が形成した扇状地に位置する。河角(2004)の地形分類図に基づくと、更新世に形成された扇状地帯(段丘面I)を開析する谷に位置する。本地点と同様に立地にある、本調査地南方300mの平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡では、中世の遺構の基盤堆積物から出土したモクレン属木材が $36100 \pm 200$ yBP (41499-40718 cal BP)の年代値を示している(パリノ・サーヴェイ株式会社,2022)。池003は、砂礫からなる河川堆積物を人為的に掘削して構築された遺構で、分析調査を実施した機能期～放置期に形成された有機質泥層(8層)は、滞水域で形成されたことが推定される。このような小凹地堆積物の場合、氾濫原堆積物のような集水域の広範囲から運搬堆積した堆積物に比較して、植物化石群集が反映する植生の範囲は狭く、ローカルな植生を反映している場合が多い。

有機質泥層(8層)から産出した花粉化石群集と大型植物化石群集の分類群を比較すると、科以下のレベルで対応する分類群と、対応しない分類群があることが認識される。このような異なる部位の植物化石群集における産出分類群の差異は、各部位の生産量や拡散能力の違い、堆積盆の状況や堆積環境に基づく堆積物に取り込まれるまでの過程、堆積後の保存状態といった、タフォノミー(化石群集の形成過程)が関係している。タフォノミーを踏まえた各部位の化石群集の比較検討によって、植物の生育地など、空間的な植生復元が可能となる(辻ほか,1984)。

花粉化石・大型植物化石において、科以下のレベルで対応する分類群として、アカガシ亜属花粉とアラカシ果実・アカガシ亜属殻斗、ヒサカキ属-サカキ属花粉とサカキ種子・ヒサカキ属種子、ウコギ科花粉とタラノキ核、ブドウ属花粉とブドウ属種子、イネ科花粉とイネ科果実、カヤツリグサ科花粉とスゲ属果実、バラ科花粉とフユイチゴ類・キイチゴ属・キジムシロ類核がある。これらの種類が池周囲に生育していた可能性がある。花粉化石では産出しなかったが、木本類のセンダン、草本類のナデシコ科A・Bも、花粉生産量が少なく、花粉の散布が虫媒性であることを考慮すると、池周囲に生育していた可能性が十分考えられる。また、多産したシダ類胞子のアカウキクサ属は池内に生育していた可能性が高い。なお、大型植物化石でのみ産出した栽培種のイネ籾・メロン類(雑草メロン型、マクワ・シロウリ型含む)は、当該期に利用された植物残滓の可能性が高い。

一方、大型植物化石では産出しなかったが、花粉化石でのみ産出した、針葉樹のマツ属(複維管束亜属を含む)、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、広葉樹のクマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、エノキ属-ムクノキ属、アカメガシワ属、モチノキ属、エゴノキ属、イボタノキ属などは、池周囲から離れた場所に分布していた可能性がある。特に花粉生産量が多く、風媒性のマツ属はより離れた場所の植生を構成していたことが推定される。また、草本花粉のガマ属、アカザ科、オオバコ属、ヨモギ属、栽培種のソバ属なども池周囲から離れた場所に生育していたとみられるが、草本花粉は木本花粉に比較して拡散能力が低いことから、池近辺に分布していたものが含まれている可能性もある。

以上の検討結果から、池003機能期～放置期の植生を推定すると、池内には浮遊シダ植物のアカ

ウキクサ属が生育し、ガマ属やスゲ属などが周囲に生育していた可能性が高い。また、池周囲には、ヒサカキ属、サカキ、アラカシなどの常緑広葉樹、落葉高木のセンダン、タラノキなどが分布していたとみられる。池から離れた場所には、マツ属やコナラ亜属などの二次林が成立していたとみられる。また、谷沿いなどの水分条件の良い場所には、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、エノキ属-ムクノキ属、エゴノキ属などが分布していたとみられる。伐採跡地などの日当たりの良い場所に生育するアカメガシワ属や、路傍雑草であるオオバコ属、栽培種のソバ属の産出、植物化石群集の産出分類群数が少なく、草本植物由来の大型植物化石が少ないことから、当該期の植生は、人為的植生攪乱の影響を強く受けた植生で、池周囲に鬱蒼とした林分の存在は考えにくく、比較的開けた場所であったことが推定される。なお、常緑広葉樹の種類は、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林構成要素）であるが、アラカシは萌芽能力が高く、サカキ、ヒサカキ属も照葉二次林などの二次林に普通に生育する種類であることから、当ても二次林として生育していた可能性が高い。

栽培種は、イネの籾、メロン類（雑草メロン型、マクワ・シロウリ型含む）の種子片、ソバ属花粉が産出した。これらの種類は当時の有用植物であったと推定される。イネ、メロン類は周辺で栽培されたものではなく、人間により投棄されるなど、何らかの過程で池内に取り込まれたものと推定される。また、ソバ属は栽培地より離れると花粉産出率が著しく低下すること（中村,1984）から、低率であっても周辺での栽培を考慮する必要がある。

有機質泥層（8層）上面から出土した、人為的に投棄された木材は、アカガシ亜属、エゴノキ属、クリ、マダケ属の4分類群に同定された。これらの種類のうち、アカガシ亜属・エゴノキ属は上記したように8層形成期に周辺に存在した樹木であり、二次林に普通に生育する落葉高木のクリも大型植物化石で確認されていないものの、花粉化石で確認されていることから、周辺に分布していた可能性が十分考えられる。したがって、池003の埋立に伴い、周辺に生育していた樹木が伐採され、埋立時に池内に投棄された可能性が考えられる。マダケ属は竹割状の形態を有することから、当時試料されたものが投棄された可能性と、周辺にマダケ属の林分（竹林）が存在した可能性の双方が考えられる。

#### 4-2 泉002構築土中の炭化物層の炭化材について

泉002は室町時代前半以降、室町期までの間の時期に機能していたと考えられる遺構である。構築土中には、湧水の濾過のために炭化物層を挟在させている可能性が考えられている。炭化物層中の炭片は、いずれも5mm角未満の小破片である。形状をみると、芯持丸木、ミカン割状、半割状や形状不明の破片で構成されており、いずれも直径1cm以内の小径木に由来すると考えられる。

これら破片から抽出した10点の炭化材片は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、広葉樹のコナラ節、ネジキ、タカノツメ、スイカズラ属の5分類群に同定された。少なくとも5種類の木材が利用されていることになる。各種類の生態性・材質をみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は上記したように湿地や乾燥地などの痩悪地でも生育する、二次林の代表的な樹種でもあり、木材は軽軟で強度と

保存性が比較的高い材質を有する。広葉樹のコナラ節は二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い材質を有する。ネジキはアカマツ二次林などの比較的日当たりの良い場所に生育する落葉低木～小高木であり、木材は重厚で強度が高い材質を有する。タカノツメは山野に生育する落葉小高木～高木であり、木材は軽軟な部類に入る。スイカズラ属は山野に生育する常緑あるいは落葉の低木またはつる植物である。利用されることがほとんど無いため、木材の材質に関する資料が無く、詳細は不明である。以上のことから、利用されている樹種はほとんどが二次林要素であることが認識される。炭化材がいずれも小径木に由来することから、周辺に存在した二次林などから、小枝などを採取し利用していることが推定される。

#### 引用文献

藤下典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,444p.

勝山輝男,2015,日本のスゲ 増補改訂(ネイチャーガイド).文一総合出版,392p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2022, 附章 平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡発掘調査の自然科学分析.「平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡発掘調査報告書」,株式会社文化財サービス,38-45

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H. G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.

谷城勝弘,2007,カヤツリグサ科入門図鑑.全国農村教育協会,247p.

辻誠一郎・南木睦彦・能城修一・千野裕道,1984,縄文時代泥炭層の層序と植物遺体群集.「多摩ニュータウンNo.796遺跡」,東京都埋蔵文化財センター第7集,96-116

中村 純,1984,古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会,581-602.

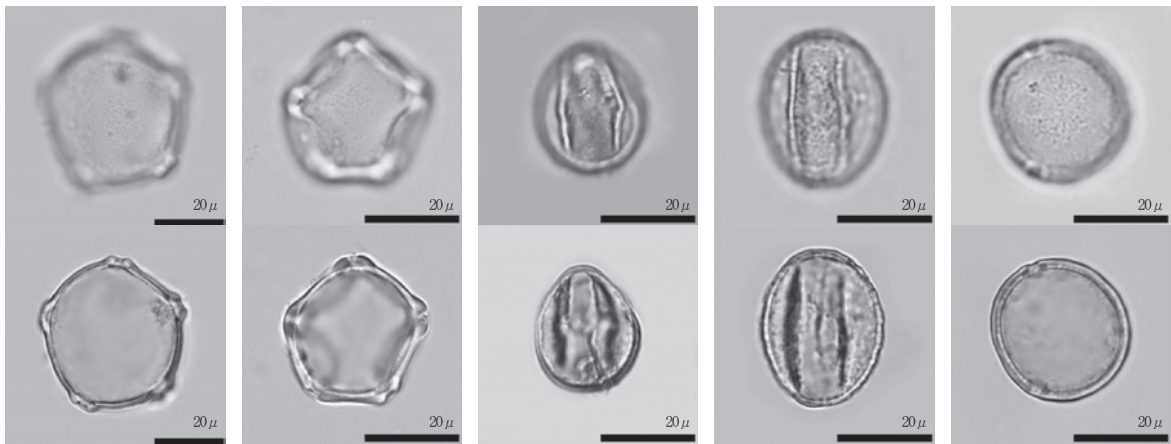
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .



図版1 花粉化石



マツ属複維管束亜属



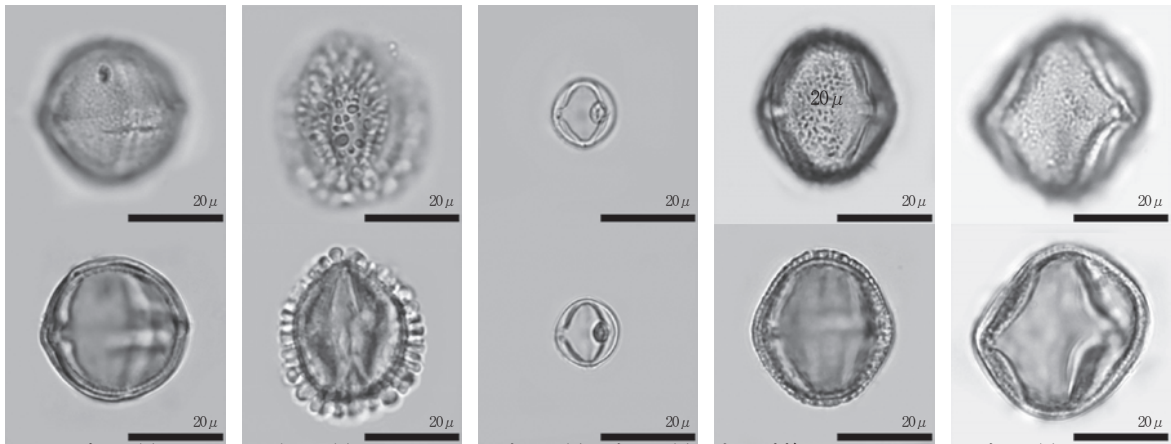
クマシデ属-アサダ属

ハンノキ属

アカガシ亜属

コナラ亜属

エノキ属-ムクノキ属



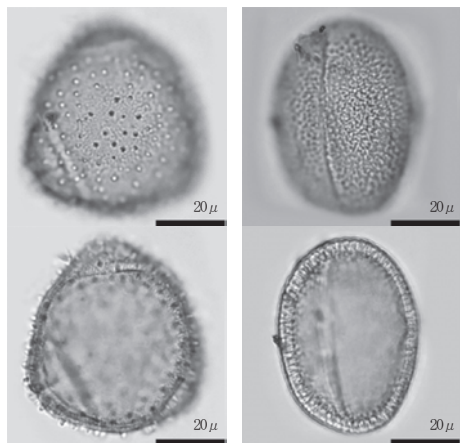
アカメガシワ属

モチノキ属

ヒサカキ属-サカキ属

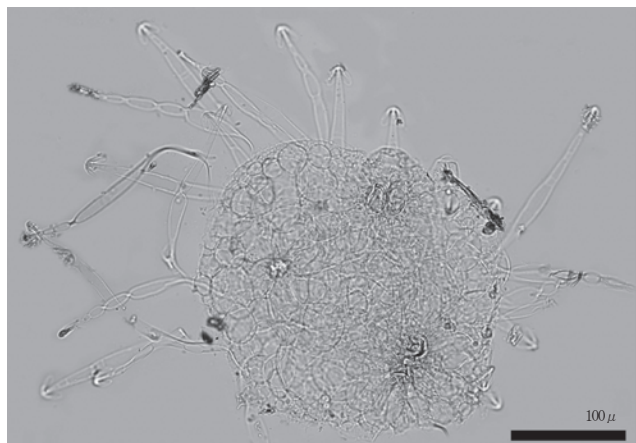
ウコギ科

エゴノキ属



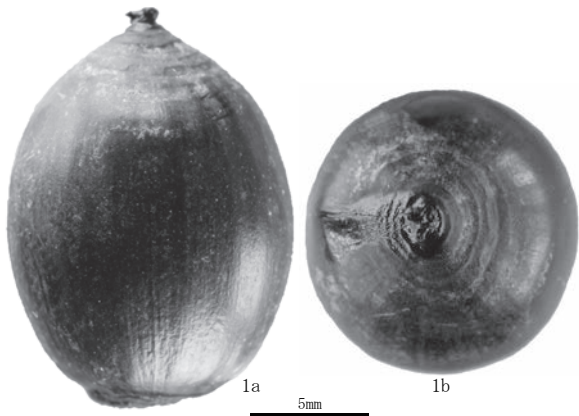
スイカズラ属

ソバ属



アカウキクサ属

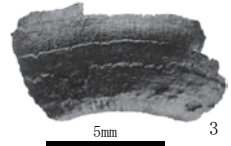
図版2 池003の種実遺体



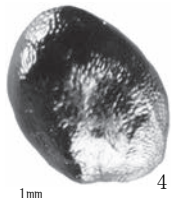
1. アラカシ(果実)



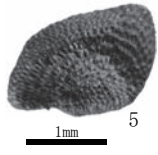
2. アラカシ(果実)



3. アカガシ亜属(殻斗)



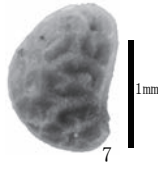
4. サカキ(種子)



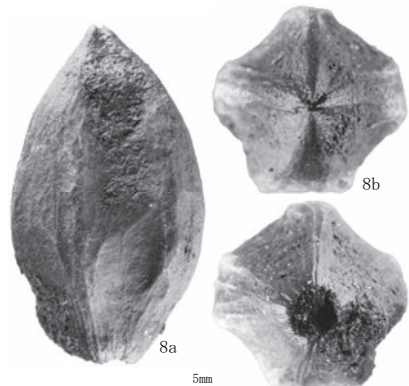
5. ヒサカキ属(種子)



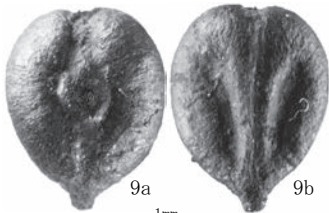
6. フユイチゴ類(核)



7. キイチゴ属(核)



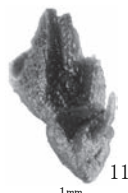
8. センダン(核)



9. ブドウ属(種子)



10. タラノキ(核)



11. イネ(籾:基部)



12. イネ科(果実:腹面)



13. スゲ属(果実)



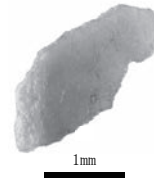
14. ナadeshiko科A(種子)



15. ナadeshiko科B(種子)

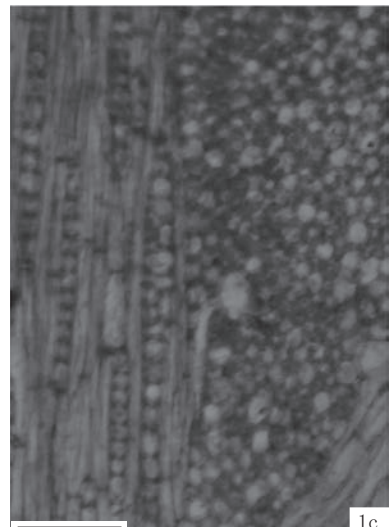
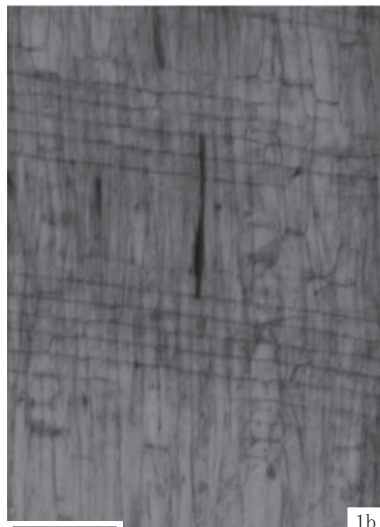
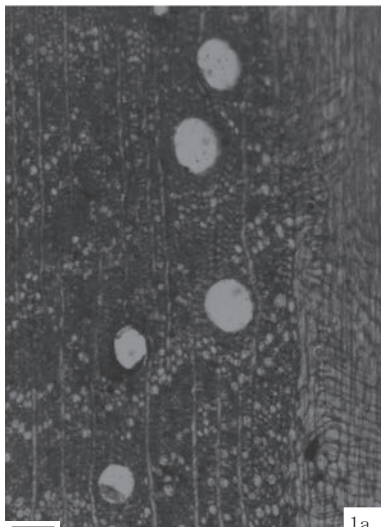


16. キジムシロ類(核)



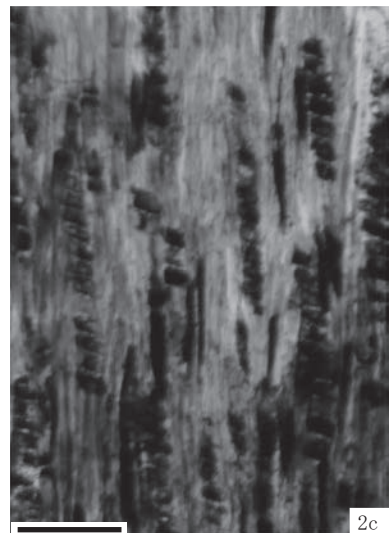
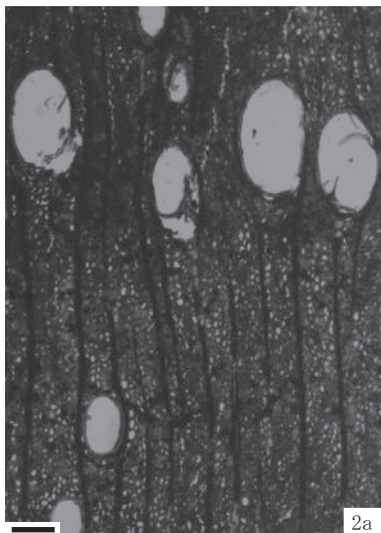
17. メロン類?(種子?)

図版3 木材(1)



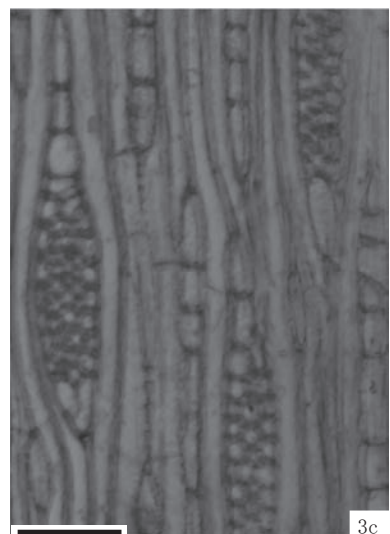
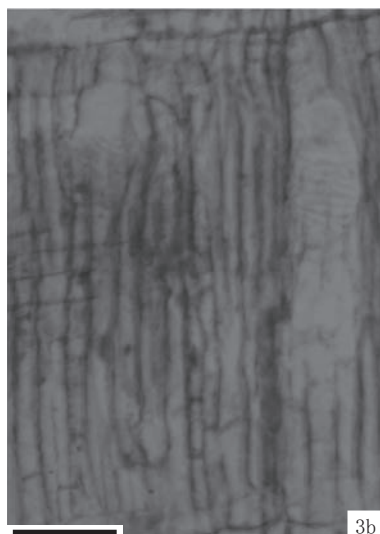
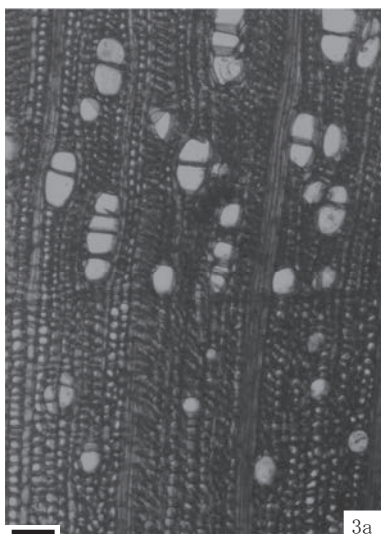
1. コナラ属アカガシ亜属(池003:試料1)

a:木口, b:柎目, c:板目 スケール: 0.1mm



2. クリ(池003:試料4)

a:木口, b:柎目, c:板目 スケール: 0.1mm

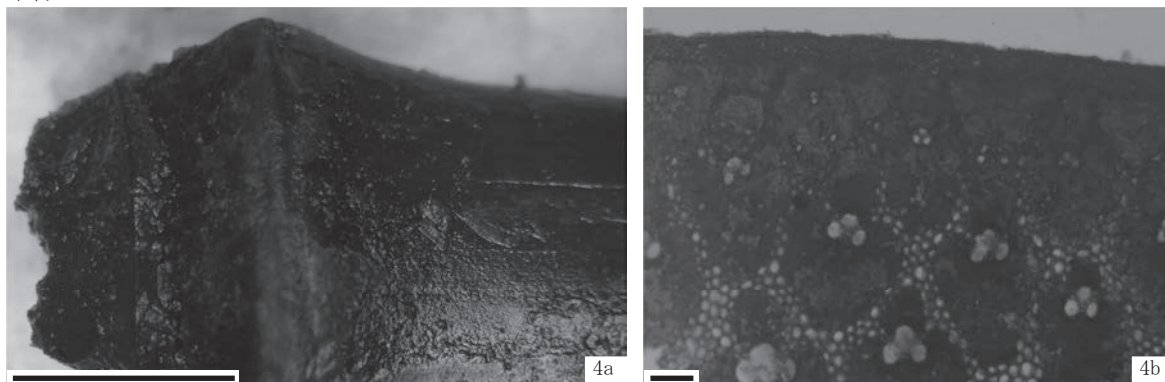


3. エゴノキ属(池003:試料2)

a:木口, b:柎目, c:板目 スケール: 0.1mm

図版4 木材(2)・炭化材(1)

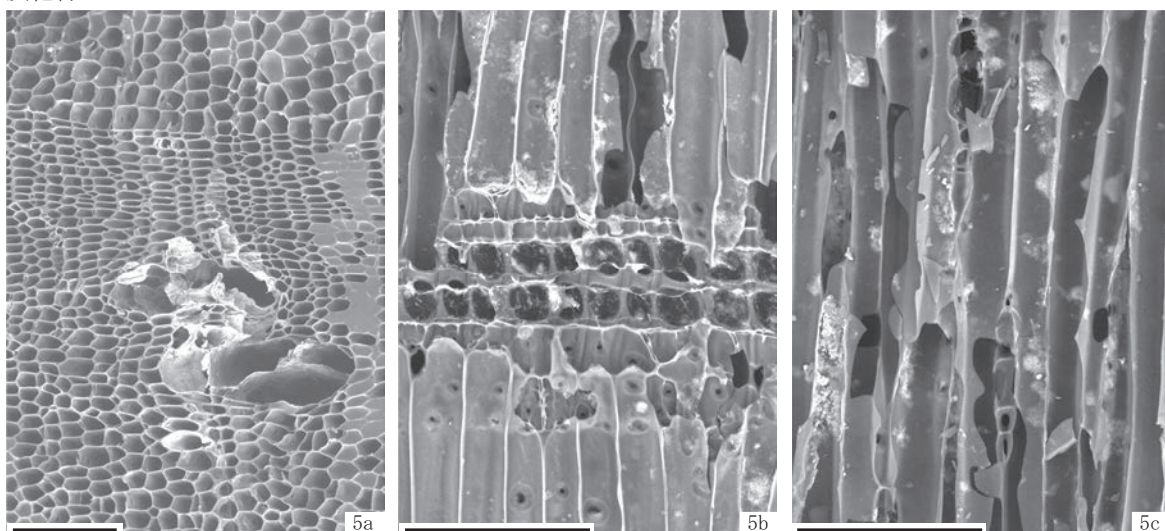
木材



4. マダケ属(池003:試料5)

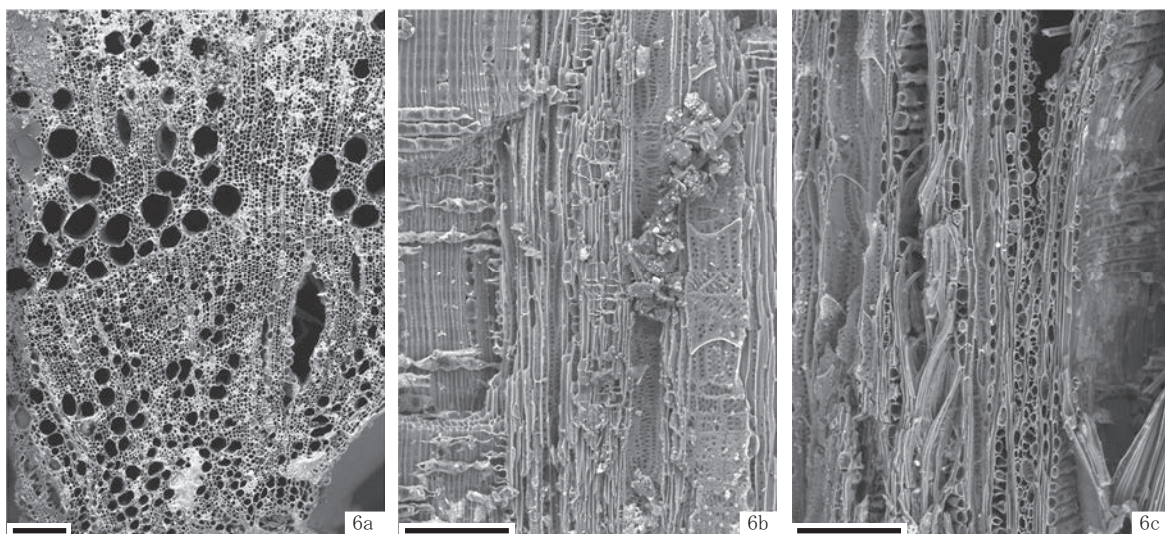
a:節の外観, b:横断面の組織スケール: 4a: 5mm、4b: 0.1mm

炭化材



5. マツ属複維管束亜属(泉002;仮4)

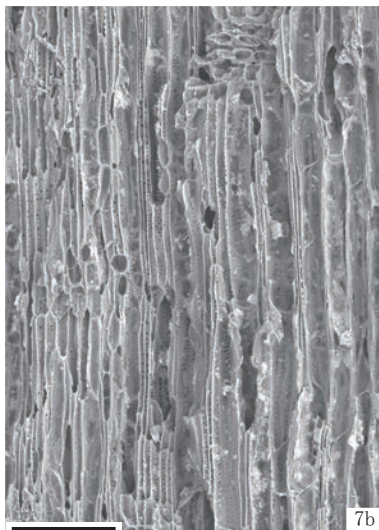
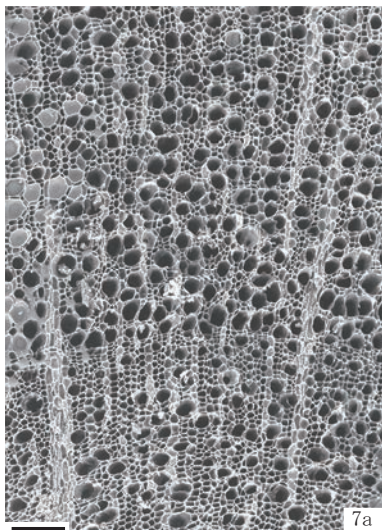
a:木口, b:柁目, c:板目 スケール: 0.1mm



6. コナラ属コナラ節(泉002;仮9)

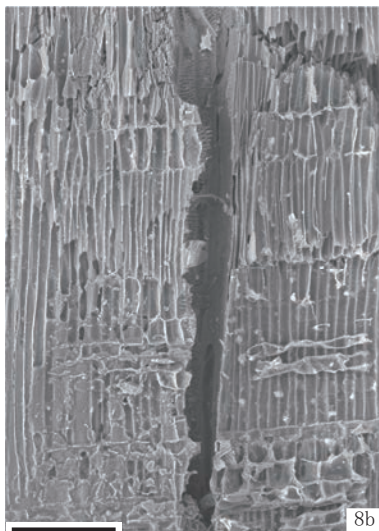
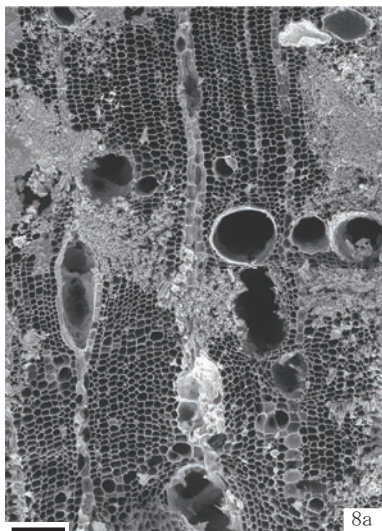
a:木口, b:柁目, c:板目 スケール: 0.1mm

図版5 炭化材 (2)



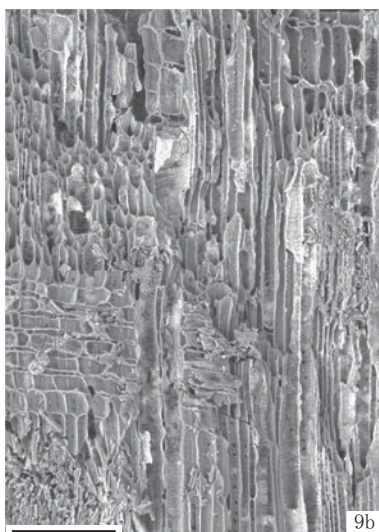
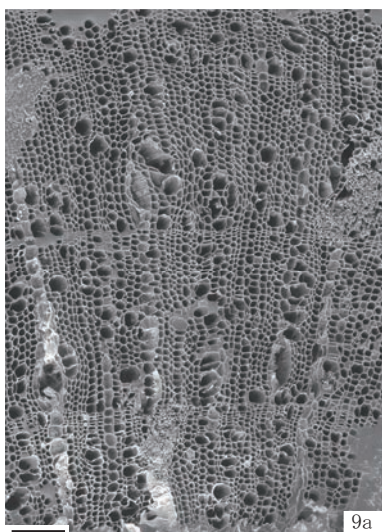
7. ネジキ(泉002;仮1)

a:木口,b:柁目,c:板目 スケール:0.1mm



8. タカノツメ(泉002;仮5)

a:木口,b:柁目,c:板目 スケール:0.1mm



9. スイカズラ属(泉002;仮7)

a:木口,b:柁目,c:板目 スケール:0.1mm

各写真のスケールは0.1mm



# 図 版







1. 遺構検出後 調査区全景（南から）



2. 調査地遠景（調査地上空より北方 左大文字山を臨む）



1. 遺構完掘後 調査区全景 (南から)



2. 遺構完掘後 調査区全景 垂直写真 (上が北)



1. 池003 敷葉工法検出状況（南から）



2. 池003 埋土除去後（北から）



1. 池003完掘状況、泉002埋甕据付穴検出状況（北から）



2. 泉002 埋甕据付穴検出状況（南から）



1. 泉002 埋甕据付穴 南北断割後（西から）



2. 泉002完掘状況、井戸017石組検出状況（南から）



1. 井戸017 井戸枠内掘削後（西から）



2. 井戸017 西半 井戸掘方掘削後（西から）



1. 池003 出土遺物 1



2. 池003 出土遺物 2



1. 泉002 出土遺物 1



2. 泉002 出土遺物 2



3. 泉002 出土遺物 3





1. 井戸017 出土遺物



2. 土坑001・011、溝014 出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうにぼうじゅうごちょうあと・おどいあとはくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京右京一条二坊十五町跡・御土居跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	望月麻佑 中西佳奈江							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒601-8127 京都市南区上烏羽北花名町8番地							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2023年11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょういちじょう 平安京右京一条 にぼうじゅうごちょうあと 二坊十五町跡・ おどいあと 御土居跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にしのみょうなかほちょう 西ノ京中保町 2 ぼん 3 ぼん 2 番・3 番・ 4 ぼん 4 番	26100	1 149	35度 01分 16.8秒	135度 43分 48.4秒	2023年 6月12日 ～ 2023年 7月13日	142.4㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京一条 二坊十五町跡・ 御土居跡	都城跡 土塁跡	南北朝期～ 安土・桃山時代	井戸 泉 池 柱穴 土坑 溝 土塁	土師器 瓦質土器 陶磁器 石製品	南北朝期から御土居構築以前の泉・池・井戸、御土居土塁を検出した。泉は特殊な構造をしており、既存の井戸を埋め立て、その直上に木炭敷と常滑産の大甕を用いた浄水装置を設けていた。これらの遺構は、鎌倉時代後半に成立した律宗泉涌寺流の東向観音寺に属する寺院である寿命院の境内に付随するものと想定される。御土居構築時に埋め立てられ、その上に土塁が築造された。			

文化財サービス発掘調査報告書 第29集

平安京右京一条二坊十五町跡・  
御土居跡発掘調査報告書

発行日 2023年11月30日

株式会社 文化財サービス

編集 〒601-8127 京都市南区上烏羽北花名町8番地  
TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社

印刷 〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る273  
TEL 075-467-5151